岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第Ⅰ報）

An Interim Report on the Oral Literatave of Tokuyama Mura, Gifu Prefecture. (Part. I)

木戸　季市　(Sueichi Kido)
高木　靖弘　(Yasuhiro Takagi)
小川　悦子　(Etsuko Ogawa)
高橋　美代子　(Miyoko Takahashi)
※野部　博子　(Hiroko Nobe)

We have investigated on the oral literatuse, wishing the creation of culture for the sound development of children. In this paper we present the oral literature handed down from generation to generation in Tokuyama Mura, a village which is a treasury of the oral literature and going to sink to the bottom of a lake by construction of a dam.

Ⅰ　研究会の紹介

1978年4月2日，岐阜県で一つの研究会が結成された。研究会の名称を，岐阜児童文学研究会「民話研究のつどい」という。

研究会の代表者である川口半平氏は，研究会をつくる「よびかけ」文の中で，つぎのように述べている。

「祖先の生活と深くつながりながら伝承されてきた貴重な文化遺産を，探求し，記録し，集成する作業は，これまでにも，その地域の郷土史家や，学者，研究者たちの手によって数多くなされてきており，……子どもへ向ける再話表現の活動も，各地域において出版物や紙芝居，人形劇，口演童話などといった多様な形態をとりながら，近年ますます盛んになってきているようです。しかし，現時点における学問的芸術的な到達点から，いままでの諸作業の集積をながめてみると，民族遺産の正統な伝承という観点からも，それらに充分な体系がうちたてられるまでには，なお多くの研究作業が必要のように思われます。[1]」

この「よびかけ」にこたえて発足した研究会は，「岐阜県の民話採集及び民話研究を基礎にしながら，地域に根ざした児童文化・児童文学の質的向上をめざすこと」を，[2]その目的としている。

具体的な活動としては，「各市町村で，民話の採集や民話の研究をしながら，古老からはなしを聞いたり，民話絵本を読むなど，児童文化活動を行なう，……また『岐阜県の民話・伝説・わらべうた資料集成』を編纂」することをかかげている。

※ 滋賀県立短期大学

研究会「民話のつどい」(以下単に「つどい」という)は，多様な活動をすすめていく研究会だといえる。しかし，活動の基礎となるのは，① 採集活動（昔話・伝説の採集・世間話・私の生いたちなどの聞きとり，わらべうたの採譜，伝承あそびの採集など),② 研究活動（『岐阜県民話・伝説・わらべうた資料集成』の編纂・発行，昔話・伝説・わらべうたの研究，再話研究，創作民話に関する考察など）である。

この「つどい」に結集した人々は，百余名にたっしている。その職業・活動・研究分野は多岐にわたり，異色の研究会である。しかし，岐阜県という地域に根ざしながら，学問研究をすすめ，子どもの全面的な発達を保障するために，秀れた文化の創造をねがっているものばかりの「つどい」である。

本稿は，この「つどい」のなかで，共同研究をしてきた，私たちの中間報告である。

私たちの研究の目標は，岐阜県下の「昔話・伝説・わらべうた」をあますところなく採集，分析，編集しようとする壮大なものである。しかし，なにぶん，研究ははじまったばかりであり，本稿は不充分なものにしかなっていない。研究の過程にあるものを報告として公表するのは，多数の方がたの批判を受けることによって，今後の研究をより実りあるものにしたいとねがっているからである。

私たちが，昔話・伝説・わらべうたの採集・研究の対象地として，まず最初にとりあげているのは，岐阜県揖斐郡徳山村と各務原市である。

対象地域として，徳山村を選択したのは，主に二つの理由からなる。

一つは，周知のように，徳山村が近くダム建設によって，湖底に沈むことによる。この地域の昔話・伝説・わらべうたは，いま採集しておかなければ，もう二度と発掘することができない可能性があるからである。

二つは，岐阜県下にあって，徳山村が昔話・伝説・わらべうたの宝庫であると考えられるからである。

各務原市を選んだのは，各務原市内に徳山村とならんで，徳山氏の領地があり，その関連を考えてみたいからである。

ただし，本稿では，徳山村だけの報告になっている。

Ⅱ 調査地―岐阜県揖斐郡徳山村―

＜徳山村の位置と村落＞ 報告のはじめに，必要な範囲で，徳山村とはどんな村であるかを，紹介しておきたい。

徳山村は，地図－1に示した位置にある。揖斐川最上部の村にあたり，東は本巣郡根尾村，南東部は揖斐郡藤橋村，南西部は同郡坂内村に接しており，北および北西部は福井県との県境になっている。

徳山村は，周囲すべてが山になっており，土地の高低差がきわめて大きい。徳山村の面積 25.356 haのうち99.3％に相当する土地が，山林であり，のこり0.7％のうち，117 ha，0.5％が耕地である。

徳山村は，八村落からなっている。揖斐川本流を下流からのぼり，村の入口に位置しているのが，下開田，徳山（本郷と通称している），上開田の三村である。揖斐川本流に沿ってさらにのぼる谷間を，東谷と称し，ここには，南から山手，櫨原（ハゼワラ),塚の三村があり，揖斐川支流である谷間を西谷と称し，この支流に沿って戸入（トニュウ）と門入（カドニュウ）の二村がある。

八村落の位置を示すと，地図－２のとおりである。

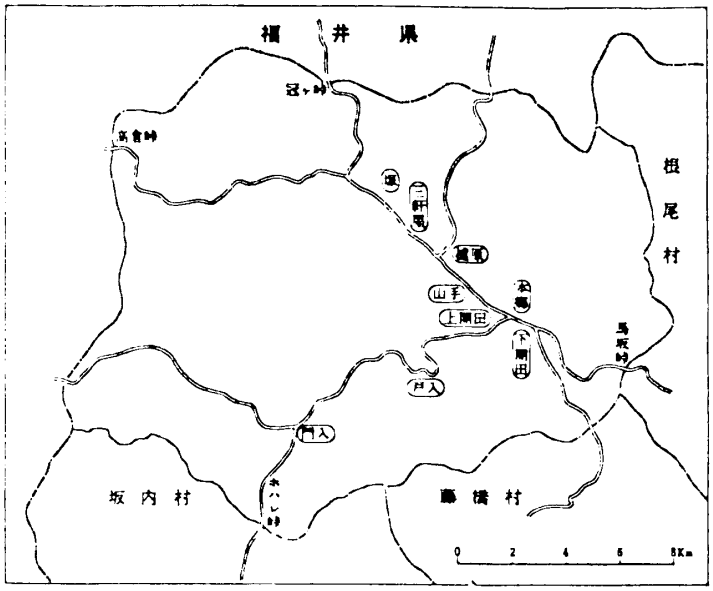
地図１　徳山村位置図

＜徳山村のはじまり＞　塚・宮が原遺跡から，徳山村に人が住んでいたのは，ほぼ4000年前まで遡ると考えられている。

農耕生活の開始とともに，徳山村に住んでいた縄文時代の人々が，そのまま当地に定住しつづけたのか，それとも移動したのかは詳らかでない。ただ現在まで，弥生・古墳時代の遺跡・遺物が発見されていないことを考えれば，移住した可能性が高いといえようか。

ふたたび，徳山村地域に人々が住んだ形跡を見出すのは平安時代に入ってからであるという。それからのち，今日にいたるまで，人々は，徳山村地域に住みつづけてきたのである。かりに，途中断絶があったとしても，徳山村は，4000年に及ぶ人間の歴史をもつ土地であった。それが，いまその歴史を，人間の手になるダム建設で，閉じようとしているのである。このことは，あらためて銘記されてよい事実である。

地図２　徳山村部落位置図



＜美濃と越前を結ぶ村―徳山―＞

徳山村の村人の生活を，ある程度明らかにすることができるのは，近世になってからである。

近世以前の徳山村で注目されることの一つに，新田義貞が徳山村櫨原で死亡したという伝説がある。

「徳山村史」の執筆者太田三郎氏は慎重に，「新田義貞が徳山にてなくなったとは断定できない」としながらも，以下の理由をあげながら今後の研究を待ちたいとしている。

① 義貞の実弟である脇屋義助は，藤島で敗れたのち，本巣郡根尾村に城を築いている。

② 徳山氏実在の人物第一代と考えられる徳山金吾貞信は，新田氏の麾下として軍功をあげたとされている。

③ 本巣郡仏生寺，堀部由則氏方系図に「義貞公来宅，美濃源氏の動静をさぐり，徳山を経て，越前に向う」という記載がある。

④　新田義貞の藤島戦死が充分確認できない。

新田義貞死亡の真偽はともかく，以上の事実から，つぎのことは確認できるであろう。

いわゆる建武の中興，南北朝内乱期に，徳山領主としてつづく徳山氏の実在を確認することができるということである。これは，徳山村の歴史の上で一つの画期である。

この徳山氏は，新田氏の配下であり，美濃国内の領主ではあるが，越前との関係が深い。

これは，徳山が地理的に美濃と越前を結ぶ交通の要路にある結果であるが，歴史事実として，現実に往来が存在していたことを確認できる意義は大きい。

なぜなら，徳山村をして美濃の秘境であるとか，山間僻地であるとかのみ評する向きもあるが，これはことの一面を把えたものであり，他地域との交流が少なくなかった村であることとを合せてみなければ，真の徳山像は見失われるからである。

また古くから，越前と美濃を結ぶ交通の要路であったことが，のちに述べるように近世徳山村においても，その性格を変えながら存続したことは，徳山村の昔話・伝説研究において看過できない重要なポイントになると考えられるからである。

＜近世徳山村の成立＞　南北朝期から地方豪族・領主としてつづいてきた徳山氏は，賤ケ岳の戦い(1583年)に敗れ，一時は滅亡の危機に直面した。しかし，1600年徳川家康に召し出され，旗本にとりたてられて，存続できることとなった。

旗本三代目重政の時，江戸詰めを命じられ，江戸住いとなったため，領地を直接支配したのは，更木村陣屋にいる代官であった。

徳山氏の知行地は，現徳山村地域（これを山方村といった）と，各務郡更木村周辺（これを里方村といった）であった。

こうして，領主徳山氏は江戸に住み，里方村に陣屋が置かれて，山方を支配する近世徳山村が成立した。

山方村の徳山村にも陣屋はおかれていたが，たしかな代官名がわかるのは，幕府治政後期の三名だけであり，その他の詳細は不明である。

それどころか,「役人の出張も少なく，普通年貢収納についても，段木代納制をとるため段木の揖斐川狩下げの期間，段木取上げの役所のおかれた大野郡北方村森前へ，山中掛りの代官が詰めて算用にあたった」といわれるように，役人は徳山村に常駐していなかったのではないかと，推測される。

したがって，徳山の村政は，本郷村庄屋が大庄屋として，その任にあたっていた。役人が常駐していなかったのではないかと推測される根拠に，徳山氏にとって徳山村が経済的には，あまり大きな意味をもっていなかったのではないかということがある。

＜近世徳山村の生産＞　徳山氏の領地の石高は，表－1に示したとおりである。

総石高2.743石のうち，徳山分は，800石余と少ない。徳山村は，徳山氏にとってその発祥の

地「本領」として精神的意義は大きくとも，経済的には更木村周辺にとおく及ばなかった。旗本として，役人を徳山村に常置させるとしたら，その経済的負担はけっして少なくなかったであろう。

また，問題は徳山村の石高の少なさだけではない。慶応四年の村鑑が「御収納銀納場所ニ候得共銀納も勧兼候間男者段下ト唱江薪ヲ伐立収納に仕候極深山ニ付田畑耕地モ少々者有之候得共寒地ニ而諸作物実入悪敷猶又作場江猪猿等多ク出喰荒シ難渋之場所ニ御座候」と書き記しているように，徳山の主たる生産物は，段木（薪）であった。

伐り出された段木は，秋の彼岸から初冬にかけて，揖斐川に流され，揖斐郡北方村森前で集積された。森前で荷上げされた段木は，ここで販売業者に渡され，その業者によって販売された。販売範囲は，揖斐郡，大垣近辺にとどまらず，墨俣，竹ケ鼻の業者も関連しているところから，もう少し広い範囲であったようである。こうして，はじめて段木は換金され年貢として徳山氏の収納するところとなったのである。

表－1　徳山氏知行高の変遷

郡	村	寛永年間村高	寛延4年村高
各務	西市場	775.88	755.97
	大嶋	773.41	773.41
	山後	356.87	356.87
	嶋崎	191.87	
	野口	204.20	53.23
	熊田	157.18	
大野	徳山	223.70	223.59
	能郷	111.87	111.87
	山手	30.25	30.25
	櫨原	23.80	23.81
	塚	35.11	35.11
池田	漆原	53.40	53.41
	池田	63.39	63.39
	戸入	152.39	182.39
	門入	90.20	90.20
	計	3.243.53	2.743.35

しかも，揖斐川に流し出した段木のうち，4割は途中で失われていたという。労多くして功少ない労力・作業をとおして，やっと，換金されるのが，段木生産であった。

しかし，揖斐川流域の農民にとって，段木流しの人足（揖斐川筋は川の流れが早く筏に組めずそのまま川に流した）は，かず少ない現金収入の方法として，こぞって出ていたと伝えられている。

＜村の生活＞　彼岸からはじまった段木流しもおわりに近づくころになると，山には雪が降り積る。村鑑は，冬のあいだの徳山の生活を「九月末ヨリ山々江雪降十月末ヨリ春三月マテ村里マテ雪中ニ相成冬春六ケ月内は田畑耕作ハ勿論山働等モ出来不申候」「右雪中女子紙ヲ少々宛漉男者紙漉之手伝致シ候」と書きとめている。この冬の紙漉とても，村人の生活をうるほすには，僅かな生産高であった。

六カ月にわたる長い期間，人々は，村と家の中に閉じこもる生活を余儀なくされた。しかし，すべての村人が，村にいたわけではない。ある人は出稼ぎに出かけ，ある人は乞食参りに出た。村人2000人を養うことは，400石足らずの収獲では，とても足りなかったからである。

乞食参りというのは，生きんがために，まさに死を賭けた旅のことである。善光寺その他のお寺参りのことであるが，途中の食糧をすべて旅先でもらい歩くという，文字通り乞食旅であったらしい。

この間の事情を，塚村に残っている道中手形が，かたっている。

「　　寺往来一札之事

一，濃州大野郡塚村，金三郎なを

右者代々浄土真宗ニ而，当寺檀家に紛無御座候。然ル処，此度善光寺並諸国仏閣江致参詣候間，若何方ニ而病死候とも，其所之御法通り取隠被下度，聊故障無之者ニ御座候。仍而寺往来相渡処如件

文久元辛酉十月

越前鯖江城下西福寺印

国々年寄中

春四月，雪が消えるとともに，新しい村の生活がはじまる。村に残っていた者は，出稼ぎや乞食参りから帰ったものを迎え，村人一同が，冬のあいだの無事と健康を祝し合う，一年の僅かな憩いの場をもつ。それが，各村々でおこなわれる春祭りである。ここでは，六カ月の村でのできごと，出稼ぎや旅行中におこったこと，他国で見聞したことが，語り合われたことであろう。

しかし，春祭りはそれだけにおわるものではない。これからはじまる労働・生産の無事を，また祈願するものであった。

村人すべてが，生活を共にする楽しみは，すぐまたおわり，男は段木伐りに出かけ，老いた父母，祖父母を中心に，村をあとにして出作り小屋に出かける。出作り小屋は，村を遠く離れた山間の僅かな耕地を耕す，その耕作に従事するあいだ生活するために立てられた小屋である。ここ徳山村では，耕作のためだけでなく，段木伐りの根拠地ともなっていた。

出作りに出た人々は，その植え付けから収獲まで，そこで働き生活する。村に下山するのは，7月はじめの野休みといわれる一・二日の休養日とお盆ぐらいであったといわれている。

お盆もまた，村人が一同に会する，一年のあいだのかず少ない日であった。

徳山村には，徳山氏の菩提寺である増徳寺以外に寺はない。村人は，道場とよばれる宗教施設で，宗教行事をおこなっていた。

僧侶はおらず，夏（のちには春も）「お廻り」と称して，越前誠照寺の僧が登山し，下開田一本郷戸入一門入一戸入一上開田一櫨原一塚とまわっていた。

そこで人々は，のどの乾をうるほすように，僧侶の説教を聞き，現世の無事と来世を祈願したと考えられる。

＜語りの場＞　ここまできて，私たちは，徳山村で伝えられてきた昔話・伝説の創作と語りの場を，見出しえたと考える。

昔話・伝説を創り出した第一の場は，2000人余の労働によっても，村高800石にすぎないという生産力の低さという貧困な村そのものである。

しかし徳山村の人々は，貧困にうちひしがれるのではなく，出稼ぎなど，それにたくましくぶつかっている。この他国での見聞が，昔話・伝説を豊かに創り出す第二の場であった。これには「お廻り」の僧侶による説教も役立っているであろうし，段木伐りと職業的に関連の深い木地師との交流も付け加えることができる。

語りの場の第一は，村の春祭り，お盆，「お廻り」など，村人が一同に会することのできるかず少な

い日である。一年中，なんらかの形で，別れ別れの生活を強いられている村人にとって，これらの機会は積る話を吐き出す日であり，村人の共通の認識を生み出す日であった。

そして第二の場が，雪に閉じこめられた冬の生活であった。変化の少ない家の中の生活・労働の中で，人々は「祭」や「お盆」，「説教」の時の思い出を，同じ話であろうと何回も何回も語り合ったであろう。また出稼ぎなど村を出ている者の無事をねがい，彼らが伝えてくれた諸々の話を，語り合ったことであろう。

＜近・現代の徳山村＞　昔話・伝説・わらべうたの研究に必要な最低限の徳山村の概略を，説明することができたと思う。徳山村紹介の最後に近・現代の徳山村に一言ふれて，この項をおわる。

近代にはいってからも，徳山村の生活の基本的パターンは，近世のそれを受けついでいた。その中にあっても近代的変化は，徐々に村に侵透してきた。行政は，徳山氏の支配からはなれ，いくたびの変遷ののち今日の徳山村となった。産業は，段木伐りから栃板ひき，炭焼きにと変り，今日ではパルプ用材の伐採・搬出を主とするにいたっている。

しかし村の生活パターンを，決定的に大きく変えたのは，1963（昭和38）の中部電力による電気の導入であった。そのご，村の生活は，テレビをはじめ電気製品に囲まれた日本各地の生活と，一見するところなんら変るところのない生活形態をとるようになった。

それは長い貧困とのたたかいの結果，徳山村の生活が日本の平均的生活水準に到達したともいえるし，近代化の波が全国に波及し，ここ徳山村にも及んだともいえる。

ちょうどそのとき，4000年に及ぶ徳山村の歴史を一瞬にして消し去ってしまう問題も発生したのである。それが，徳山ダム建設計画の発表であった。徳山ダム建設が本決りになり，完成するには，まだいく多の紆余曲折があると考えられる。

4000年に及ぶあいだ，この地の人々が額に汗し，文字通り生命をかけてつくりあげてきた徳山村。それが，やっと日本の平均的生活を享受することができるようになった時に，歴史を閉じることになった。

徳山村の人々の胸の内に去来するものは，深い。永い歴史の幕を，人間の手によって閉じられることが，いかなるものか，あらためて問いなおされてしかるべきである。

Ⅲ　調査地域，期間および話者・演唱者

＜調査地域及び期間＞

徳山村は，本郷，上開田，下開田，戸入，門入，山手，櫨原，そして塚の8集落から成るが，今回調査に入ったのは，戸入および本郷の二ケ所である。

調査に入る事前の準備として，7月25日，話者・演唱者確保のため現地に初めて入る。

徳山村の概要を知るため，9月10日，大牧富士夫氏（徳山中学校教諭）を岐阜市に招き学習会を開き，調査スタッフ一同予備知識を得る。

採集調査は下記日程で行った。

戸入　1978年9月14日午後～15日午前

本郷　1978年9月15日午後～16日午前

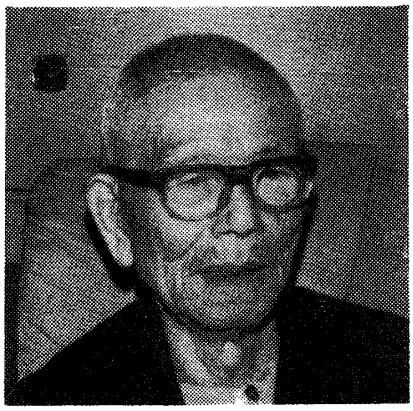
＜話者・演唱者の紹介＞

徳山村調査で昔話・伝説を語り，わらべうたをうたっていただいたのは，つぎの5名のかたである。

◉　北村つま氏

1891(明治24) 年8月16日，徳山村本郷で生まれた。若いころ紡績工場に働きに行っていた。現在，本郷に住んでいる。

◉　北村和兵氏



1889(明治22) 年，本郷に生まれた。若い頃は，徳山村の主産業である段木（薪）の伐採に従事していた。

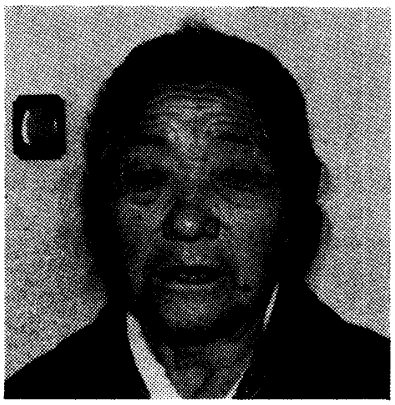
現在，本郷に住んでいる。

◉　増山たづ子氏

1917(大正6) 年4月15日，徳山村戸入に生まれ，今日まで戸入で生活している。

旅館「増山屋」の経営者として，徳山村を訪れる人々の世話をされている。徳山村の人々と生活の写真を撮りつづけ，各地で個展を開いている。

◉　村山いちえ氏



1892（明治25）年７月25日，徳山村本郷で生まれた。北村つま氏と同じように，若いころは紡績工場に働きに出ており，東京・大阪での生活をおくったことがある。

現在，本郷に住んでいる。

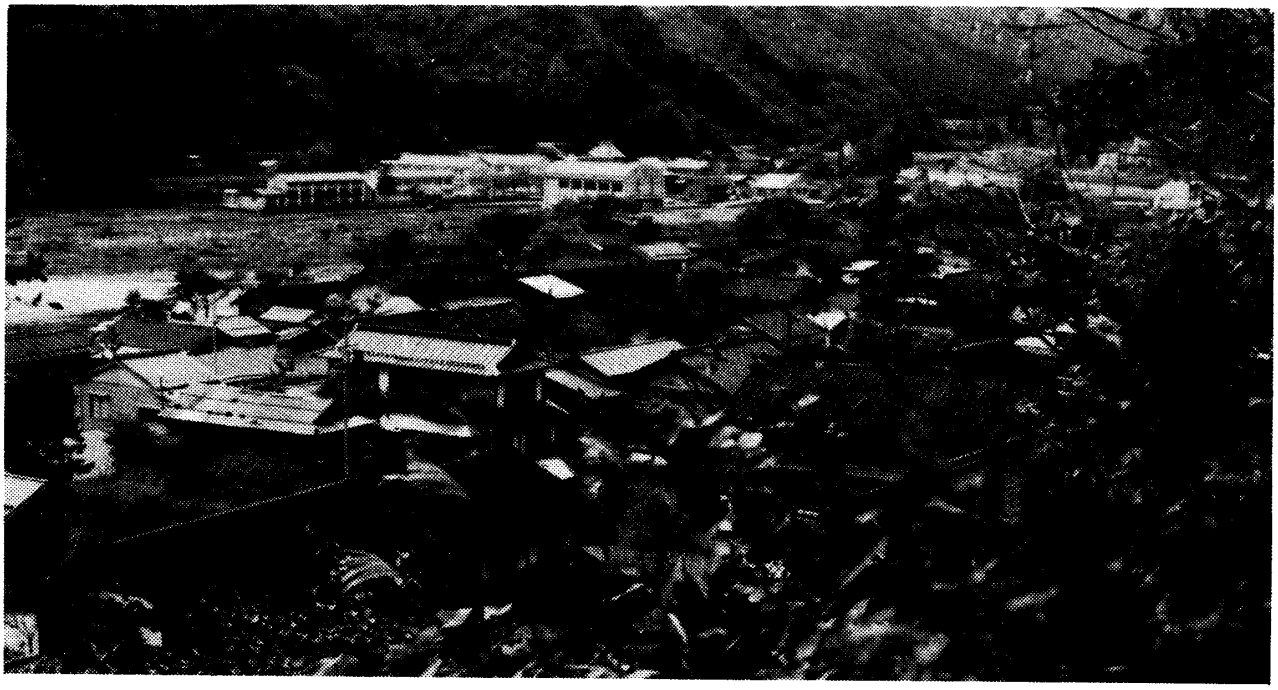
◉　山本花枝氏

1905（明治38）年７月16日，戸入で生まれた。若いころは，北村つま氏・北村いちえ氏と同じように紡績工場に働きに出ている。徳山村の若い女性は，当時紡績工場に行くことを，習わしとしていた。名古屋・京都・大阪などで働き，25才で結婚のため戸入に帰郷した。

私たちに語ってくれた昔話は，彼女の祖母の山本かる氏から聞いたということである。

かる氏も戸入で生まれ育った人である。花枝氏の母親しげ氏も戸入の人であったが，花枝氏は「母から昔話を聞くことはなかった」と語っている。

本郷地区景観



戸入地区景観

注

(1) 岐阜児童文学研究会「民話研究のつどい」よびかけ文

(2)(3) 同上研究会規約

(4) 以下徳山村の紹介にあたっては，乞食参りと，それを示す道中手形を昭和46年刊の千葉乗隆氏の『中部山村社会の真宗』によったほか，歴史事実については，煩雑をさけ頁数を示していないが，すべて徳山村史編集委員会編さん，岐阜県揖斐郡徳山村役場，昭和48年発行の『徳山村史』によっている。

本稿における徳山村の紹介の目的は，徳山村の歴史，概況の事実を示すことにあるのではなく，昔話・伝説・わらべうたが創られ，語りうたわれ，伝えられた条件を見出すことにあり，その観点から，徳山村を見直し，考えの一到達点を提起した。ご批判，ご教示を賜われば幸である。

Ⅳ わらべうたの採集について

私たちの祖父母・父母たちがうたったわらべうた。そして私たち自身が子どもの頃，うたい，あそんだわらべうたが，現代の子どもたちにもうたいつがれているのだろうか。

現代の子どもたちをとりまく生活環境は，私たちの子どもの頃とはあらゆる面で著しく変ってきている。遊び場がないこと，遊びの道具，遊びの質の変化，さらにはテレビを筆頭とする視覚文化の氾濫という中で，はたしてわらべうたそのものが現代の子どもたちの世界に存在しているのだろうか。そんな卒直な疑問がもたれる。

今回の徳山村調査で，むかし話やわらべうたを語ってくれた老人が云った言葉が印象深く残っている。そういう話を誰から聞きましたか，「子どもの頃，わしらのばあさんから聞いたんヨ」お孫さんにそういう話を聞かせてあげますか，「テレビやマンガの方が面白いてノオ，話してやったこたぁな

いわナ」。

先日，私は家の庭でこんな光景を目撃した。4才になる娘が，近所の女の子5・6人程と仲間になって，あるあそびを教えて貰っているのを。そのあそびは，それぞれのはきもの（サンダルや運動靴ではあったが）を中心に並べて歌をうたいながら順々に指で指して行くのである。そのうたっている歌は「じょんじょんかくし，じょりかくし……」であった。ことばや旋律，そして遊び方も多少変ってはいても，まぎれもなく昔ながらのわらべうたであった。

わらべうたは，大人たちが気がつかないところで，子どもたち同志の中に，現代も立派に生きていることがわかる。

＜目　的＞

わらべうたと，昔話の伝承形態を比較するとき，昔話が，必らず大人から子どもへという伝承形態をとるのに対して，わらべうたは，それと同様な形態をとる以上に，子ども集団の中で年長の子どもから年少の子どもへと伝えられる形態がより多くみられる。こうした伝承形態の違いから，わらべうたは昔話よりも大きな変化があろうことは，容易に想像がつく。そうした前提にたって，過去のわらべうた，現代のわらべうたを採集調査・分析することによって，次の諸点を追求し，研究をすすめたいと考える。

1. 過去のわらべうたを資料として保存する。
2. 分布と伝承形態を明らかにする。
3. 現代の子ども社会におけるわらべうたの存在形態を明らかにする。
4. わらべうたのもつ子どもの発達にそくした独自性を追求する。
5. 現代の幼児教育，ことに音楽教育に素材としてのわらべうたをどう生かしていくか研究する。

今回の第一回徳山村調査も，以上の視点にたって実施した。しかし，この調査においては，対象が老人だけであったこと，したがって採集出来たわらべうたが過去のわらべうたのみであり，更に曲も少なかったこと，などから，わらべうた研究分野での先輩の資料を確認するにとどまった。そうした資料をもとに，今回の調査で得た素材とも比較分析しながら，この第一報をまとめる。

＜採集及び採譜方法＞

録音機材を用い録音し，後に再生し採譜する方法をとった。

演唱にあたっては，同じものを二回演唱するのを原則とし，手まり唄，手おどりなど，それぞれの身ぶり，手ぶりを実際に行なって貰った。意味不明な言葉については，その場で尋ね，方言などは解説して貰ったが，演唱者自身にも意味不明のことも多々あった。

採譜については，まず，音高は実音で採譜し，それを更に，見易い調，歌い易い調に移調した。ただし，曲ごとに歌い出しの音は実音名で記しておいた。また，平均律での1音，半音になじまない音は，ほぼ4分の1音の間隔で嬰記号，変記号を用い，それぞれ記号の前に上向き，下向きの矢印を付した。テンポについては，単位音符1ケを1分間におおよそいくつ打つかをそれぞれ数字で示した。

しかし，手まりうたなどは，まりを使用せず，手ぶりだけなので，実際のあそびのテンポよりは相当速いことが予想される。

それぞれの曲につけた題名は，その曲の歌い出しの言葉をもってあてた。また，その意味のはっきりするものについては漢字をあてた。

＜採集わらべうたについて＞

今回採集出来たわらべうたは，戸入で2曲，本郷で3曲の計5曲である。しかもその5曲とも過去において採集されたものであって，演唱者も全く同一人であった。以下，それぞれの曲について，歌詞，その注釈，旋法，類歌などの点を検討した。

1.　あったら松やから松や[1]（手まり唄）

演唱者　山本花枝（戸入）

歌詞

※あったら松やから松や
西に差いたる大枝に
※きくまつおとこが巣をかけて
その巣をおろしに行ったなら
雨が降るやら霧がまくやら
しれなんだしれなんだ
ちょいと一かんおろいた

※あったら松やから松や
　ああ，から松や，から松やの意
※きくまつおとこ
　人の名か？とのこと

旋法

ミファラシドミの陰旋法を使った曲である。ただし，ファの音が¼音高い。すなわち↓#ファの音が出てくる。しかも後半部では，明確な#ファも出てくることから，陽旋法に転調したと考えることが出来る。

類歌

徳山村の山手地区において全く同じうた[2]が過去の調査で採集されている。歌詞では「きくまつおとこ」が「きちまつおとこ」に，「しれなんだ」が「おれなんだ」に，旋律的には陽旋法で転調が見られないことぐらいで，類歌というよりは同歌というべきであろう。村内他地区に資料がないこと，あるいは未採集であるが，同村内で広くうたわれていただろうことは想像に難くない。しかし，岐阜県内他地区，あるいは全国的にみても，既存資料の中には，この類のうたは見当ら

ない。

2. いざや若い衆[3]　（手おどり唄）

演唱者　山本花枝（戸入）

歌詞

いざや若い衆花折り行こか
花はなに花
ぼたん，芍薬，つつじ花んじゃ
一本折って手に持って
二本折って腰んさし
三本目に日が暮れて
からすん巣にとまろうか
とんびん巣にとまろうか
からすん巣は糞だらけ
とんびん巣にとまって
朝起きてみたりや
※ほけんたつけたつ

※ほけんたつたつ

湯気が立ち昇るの意，朝起きてまわりを見てみたらやはりしたばかりの糞だらけで，湯気が立ち昇っていた。

あそび

二人が向かい合い，一つ手をうって鳴らし，お互いの右手と右手，また一つ手を打って相手の左手と左手を合わせるという動作を，うたに合わせてくり返していくあそびである。

旋法

この曲は陽旋法というよりは，律旋法と解した方が適当と考えられる。律旋法の上行の際のレ～ファの変化に該当するファが随所に出現する。ただし，この曲の場合のファは，♯ファと♮ファ のあいまいなものである。

類歌

前出のうた〝あったら松やから松や〟と同様に徳山村門入地区に全く同じうた[4]が見出される。歌詞でいえば，門入のうたは「朝起きてみれば」以降に，戸入のうたの「ほけんたつけたつ」に替って，「ちよの様なめいしょうが，笹色の帯を前にちょっこり結んで」となって終っている。地域的には，門入と戸入は隣り合ってはいるが約8キロメートルのへだたりがある。旋律は，戸入より単純で，ラドレの三つの音だけから成る。ラを核音としたテトラコードである。この二つのうたは同歌であるが，戸入では手おどりうたとして歌われ，門入では手まりうたとして歌わ

れている。

類歌としては，岐阜県加茂郡に見出すことができる。

・子ども衆 子ども衆　花折りにいこまいか　何花折りに　ボタン　シャクヤク　折りに　一本折って 手に持って　二本折って腰にさし　三本目に日が暮れた　カラスの宿に泊まろうか　トンビの宿に泊まろうか　トンビの宿はとびくさい　スズメの宿に泊まって　朝起きてみると　こがねのようなじょうろうが　一杯くってしゃくどん　二杯くってしゃくどん　三杯めにおかずがのうて食えなんだ　わしらの方のおかずは　白ウリからウリまんがウリ　はっちょうがわらの　アユのすし　アユのすし[5]

3. でんでんたたくは[6]　（手まり唄）

演唱者　北村つま（本郷）

歌詞

でんでんたたくは誰さんや
本町横町のじへえさん
おまえは何しにおいでたや
※雪駄（せきだ）がかわりてきたわいの
おまえの雪駄は安雪駄
わたしの雪駄は京雪駄
京の糸屋のぜんしろは
ひとり娘をもちかねて
今年は十九で嫁はたし
嫁入道具はなになにや
※ぶんだい鏡台京※すずら
長持ななつに帯やすじ
※そろめん足袋を八足に
※まきでのけそろを十三本
これほどしたててやるほどに
去られて来（こ）んなよ※おまんぞろ
去られて来たときどうするや
頭をすって衣（ころも）ん着て
西を向いてもなむあみだぶつ
東を向いてもなむあみだぶつ
西も東も極楽や極楽や
※極楽どうじょへ参てみりゃ
けっこなお庭に井戸堀りかけて

井戸は切石(きりいし)つるべはこがね
水くみ女子はけしの花けしの花
ちょと十かんわたいた

※雪駄
　草履の裏に皮をはり鉄を打ったはきもの，せった。
※ぶんだい
　文台，文机
※すずら
　つづら
※そろめん足袋
　ちりめん足袋
※まきでのけそろ
　蒔絵のきせる
※おまんぞろ
　おまえさん，大事な娘だからという意味だろうと解しているとの説明あり。
※極楽どうじょ
　極楽浄土，どうじょ……じょうど

旋法

ドレミソラドの音列を使った呂旋法である。核音はソ。旋律的には前段は同じふしのくり返しで後段になって，音域も下方に広がり，リズムにシンコペーションが出現するなど変化に富んできている。

類歌

前出 1.のうた，2.のうたと同様に徳山村内には同歌が見られる。隣の地区の山手において，歌詞も旋律もほとんど同じ[7]うたが採集されている。

このうたは岐阜県内および全国的にも類歌が多く見られる。県内においては，恵那郡加子母村の〝京の糸屋のぜんしろは[8]〟，恵那市の〝とんとんたたくは誰さんじゃ[9]〟などがある。徳山村のうたと比較すると，前者は前段部分が欠落，後段部分でも話しのすじが変わっている。後者も，話しの後段部分，すなわち「西を向いても……」にあたる部分以降から念仏や，お寺とは関係なく替っていっている。全国的規模で見てみると，高知県の〝お白の[10]さん〟「……前略，とんとんたたくは誰さんぞ　新町米屋の繁さんじゃ　雪駄が代ってかえにきた……以下略」，江戸時代の尾張に伝わった「とんとせ[11]誰さんじゃ　新町米屋の武平さん　今頃何しにござんした　雪駄(せきだ)がかわってかえにきた……以下略」と見出すことができる。全国的に古くからある手まり唄で，いずれも長編の物語りとなっているが，うたいつがれていくうちに話としての一貫性は失なわれてしまっている。

4.　じょりかくし[12]　（鬼あそび唄）

演唱者　北村つま（本郷）

歌詞

※じょりかくしくねんぼう
まったいこうにてっしりと
てっしりことうって
まつもとまあまあ
じょうりきじょうまん
たんこんちきりきしょ

※歌詞の意味としては演唱者自身にもほとんど解せないとのことであった。

ぞうりかくしの遊びは，極めて古くからあったもので，うたもたくさんあり，ことばも子どもの口に合うように長い間に変化したものと考えられる。いずれにしても，鬼あそびうたの特色として，はやしことば的なもの，呪文的なもの，と意味をなさないことばが出てくるものが多い。

くわしい比較・分析は次項にゆずる。

5.　れんげの花と桜の花と[13]　（手まり唄）

演唱者　北村つま（本郷）

歌詞

れんげの花と桜の花と
結びあわせてたすきにかけて
権現さまへ※ごふくに参る
一門こえて二の門こえて
三なる御門をきりりとまいて
向こいの山に光るは何じゃ
月か星か蛍の虫か
月でもないが星でもないが
※じゃのうんさまをお江戸へのぼる
その乗物が※じゃの光りじゃの光り
ちょっと一かんわたいた

※ごふく

子福，子どもを多くもつしあわせ，子さずけ祈願

※じゃのうんさま

大蛇

※じゃの光り

蛇のうろこの光り

旋法

前出3.のうたと同じく，ドレミソラドの呂旋法である。核音も同じくソである。旋律も全くよく似ている。演唱者が同一人であるため，旋律まで似てしまったものと考えることも可能である。

類歌

前出の4曲と同様に徳山村内には同歌が見られる。山手の〝れんげの花と〟[14]は歌詞においては全く同じである。さらに同じ山手の〝てんまりや〟[15]は「れんげの花と桜の花と結び合わせてたすきにかけて」のうたい出し部分が「てんまりやてんまりや　てんにおびこうてはりこんで　むかえの山のえだを下ろして　こびきだいくにつくらして」と替っているだけで，以降「権現さまえ……」からは全く同じである。

県内では，揖斐川下流の同じ揖斐郡内に[16]「れんげの花とすもとりの花と　結び合わせてたすきにかけて　源四郎様へ奉公にまいる　源四郎様はどちらでござる　一の門越え二の門越えて　三の門越しつうっといけば　けっこなお庭に井戸堀りかけて　井戸はきり井戸つるべはこがね　水汲む女は　百合の花ケシの花　ちょっと一かんわたいた」というのがある。このうたは後段部分「けっこなお庭に…」以降では，前出2.の〝でんでんたたくは〟の最後の部分とも共通する。

全国的にみると，同歌は見当らないが，東京，静岡，山梨の「むこう山の鳴き鳥は……以下略」[17]や，同じく東京の[18]「あの山で光るものは　月か星か蛍か　月なれば拝み申すが　蛍ならば手に取る　手に取りてかごに入れりゃ　朝も晩もひかひか」というのが見られるぐらいである。

＜「じょりかくし」における比較検討＞

「じょりかくし」は鬼あそびの1種として，全国的にうたわれ，遊ばれているわらべうたである。この曲をもとに，この項では，次のことを比較検討していく。

1. 徳山村の子どもたちが，現在うたっている「じょりかくし」の比較検討。
2. 徳山村の2つの地区でうたわれた過去の「じょりかくし」の比較検討。
3. 徳山村における現在と過去の「じょりかくし」の比較検討。
4. 徳山村の現在の「じょりかくし」と全国的に流布している「じょりかくし」の比較検討。

今回の徳山村調査にあたり，採集したわらべうたは，前述したように，過去のものばかりで，地域的にも戸入と本郷のみであるということ，そして，「じょりかくし」は本郷のみであるということを前提に，この項の比較検討は，手許にある資料をもとに発展させていったものである。

この歌に伴う遊び（動作）は，各地域により，旋律・歌詞が異なっていても，それは同じようである。各々の片方の履物を一列に並べ，1人（鬼）が歌いながら1つずつ順々に突っついて，歌の最後に当たった履物を取り出す。その動作を最後の1つになるまで，何度も繰り返し，最後に残った履物

をかくし，鬼がその履物を見つけ出す，という遊びがだいたいのパターンとなっている。

徳山村の子どもたちが，現在うたっている「じょりかくし」を見ると，楽譜8[19]からもわかるように，（A_1が塚，A_2が櫨原，B_1が戸入，B_2が山手，B_3が本郷[20]，Cが門入）東谷の奥地区の塚と櫨原が1つのグループをなし，中心部の本郷，山手，戸入地区が1つのグループを，そして西谷の奥地区の門入が，本郷と同じ歌からさらに発展させているが，これは転校者によるものであり，本郷と同じグループに入れてよい。この分類は，徳山村の地域性からいっても，このような分布状態になりえたことはうなずけるのである。

次に，徳山村の老人に歌ってもらった過去のわらべうた[21]を見ると　本郷と門入とは大きな違いがみられる。門入のうたは，現在子どもたちが楽しんでいる曲と殆んど違いがみられず，比較的新しいうたであると考えられる。本郷の曲は独自のものであり，現在，東谷の奥の塚，櫨原でうたわれている曲に類似を見ることができ，伝承の一形態をうかがわせる。

このわらべうたは，全国的に流布している。≪日本のわらべうた[22]≫の「鬼遊び」の項を参照しても，北海道から九州地方までまたがって，約50数種の類歌を見ることができる。ここでは，A[23]は岐阜市，B[24]は名古屋市，C[25]は東京都文京区，D[26]は島根県簸川郡に例を取り楽譜にした。この他に沢山の類歌を見るが，旋律的にも少しずつ違いを見せ，歌詞でも異なった内容と多くの方言を見ることができる。この楽譜からもわかるように，岐阜市と徳山村の本郷周辺及び西谷一帯と同歌であり，さらに，名古屋市の曲（B[24]）と門入の曲（C[19]）とは類歌であるといえる。

全体的にわらべうたを検討した時，過去のわらべうたが，旋律において単純であるのに対し，新しいわらべうたは，変化に富み，音域も広くなり，いわゆる現代風に発展してきているということがわかる。しかし，音階的には，昔どおりの旋法がとられ，日本音楽の音楽的特徴を明確な形で示している。

現在の幼児達は，早い時期から音楽に親しんでいる。ピアノのおけいこなどにも例があげられるように，西洋音楽の発展はめざましい傾向を帯びている。しかし，子どもたちの遊びの中で伝承され，作り変えられる，いわば，子どもの民謡といわれるわらべうたを，もう一度見直すことにより，音楽教育を発展させることができるのではないだろうか。

＜まとめ＞

第1回目の徳山村調査は，採集出来た素材は少なかったにもかかわらず，わらべうたの研究をはじめたばかりの私たちにとって，多くのことを学ばせてくれた。

① 演唱者各人が，その人自身の慣れ親しんだ旋法を持っているということである。すなわち，その演唱者がうたううたは，ほとんどすべてが似通った旋律になってしまうということである。

② したがって，同一の曲でも複数の人から採集することが望ましい。

③ さらに，年代の異った演唱者から採集が出来るとすれば，伝承の形態知るうえにも貴重な素材となり得る。

④ 同一の曲に限らず，どんな曲でもあらゆる年代の演唱者から採集することが必要である。

⑤　現代の子どもたちのわらべうたを採集・研究することの重要性が一層増大した。

⑥　さらに，日本の伝統音楽についての認識を深めることが重要である。

以上のことから，研究をすすめるうえで，次のことを私たちの今後の課題としたい。

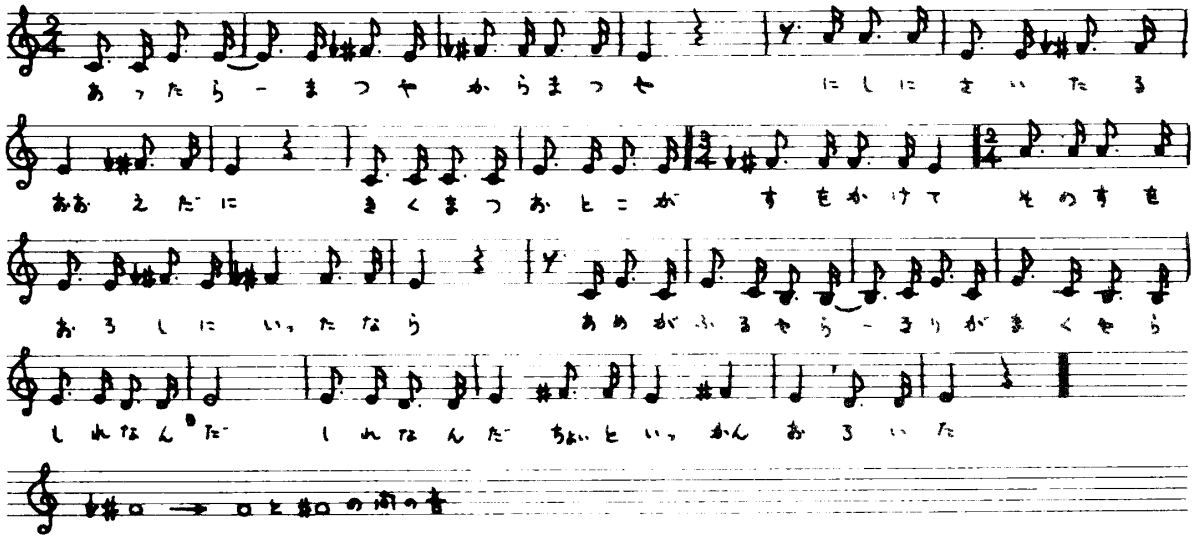
過去のわらべうたをうたってくれた老人が，日本の伝統的旋法を身につけていたことと，新しい現代のわらべうたが，やはり，同様の伝統的旋法のうえに成り立っているのを見るとき，初めての音楽教育をうける保育園・幼稚園の幼児教育における音楽教育に，わらべうたは極めて重要な比重をしめるといえる。そのことから，目的の5.にあげたごとく，わらべうたを現代の幼児教育にどう生かしていくかということの研究がますます重要になってきた。

注

(1)　楽譜1
(2)　楽譜6　岐阜教育大学教育学部編　郷土資料(5)岐阜県のわらべうた今昔　徳山村篇　昭和49年　P62(18)
(3)　楽譜2
(4)　郷土資料(5)　P63(23)
(5)　赤座憲久編　美濃の民話　第2集　未来社　昭和52年 P 193
(6)　楽譜3
(7)　郷土資料(5)　P53(2)
(8)　楽譜7
(9)　美濃の民話　第2集 P 191
(10)　尾原昭夫編著，日本のわらべうた（室内遊戯歌編）社会思想社　昭和47年　P 183
(11)　日本のわらべうた（室内遊戯歌編）P 184
(12)　楽譜4
(13)　楽譜5
(14)　郷土資料(5)　P58(10)
(15)　郷土資料(5)　P57(8)
(16)　美濃の民話　第2集　P 193
(17)　日本のわらべうた（室内遊戯歌編）P 181
(18)　日本のわらべうた（室内遊戯歌編）P 192
(19)　楽譜8　郷土資料(5)　P47
(20)　岐阜大学教育学部編　郷土資料(3)　昭和47年　P 106
(21)　楽譜9　郷土資料(5)　P76
(22)尾尾原昭夫編著　日本のわらべうた（戸外遊戯編）P 124
(23)　楽譜10　日本のわらべうた（戸外遊戯編）P 128
(24)　日本のわらべうた（戸外遊戯編）P 129
(25)　小泉文夫編　わらべうたの研究　楽譜編　昭和47年　P 225
(26)　日本のわらべうた（戸外遊戯編）P 124

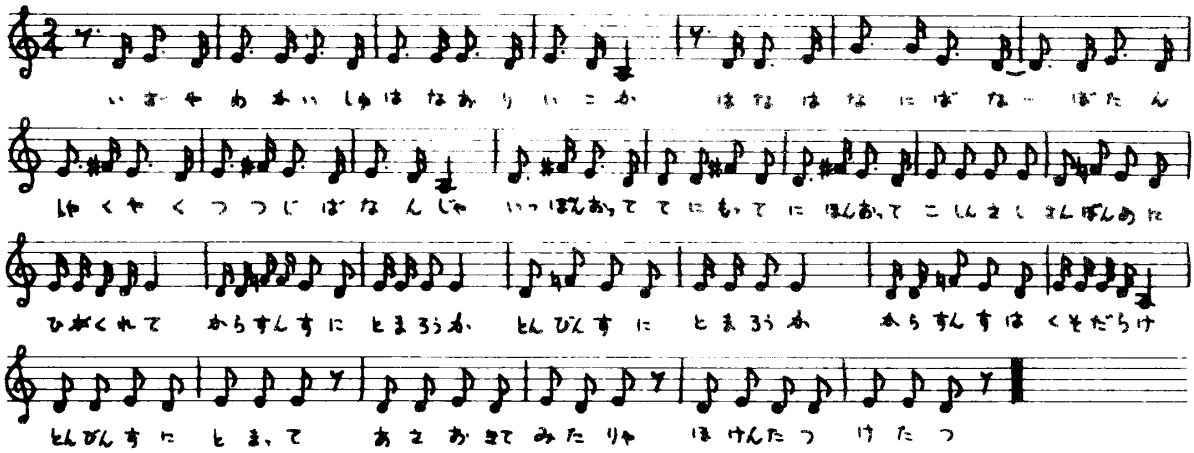
楽譜1≪あったら松やから松や≫

（出発音の実音ハ　速度M.M.120　採譜者高木）



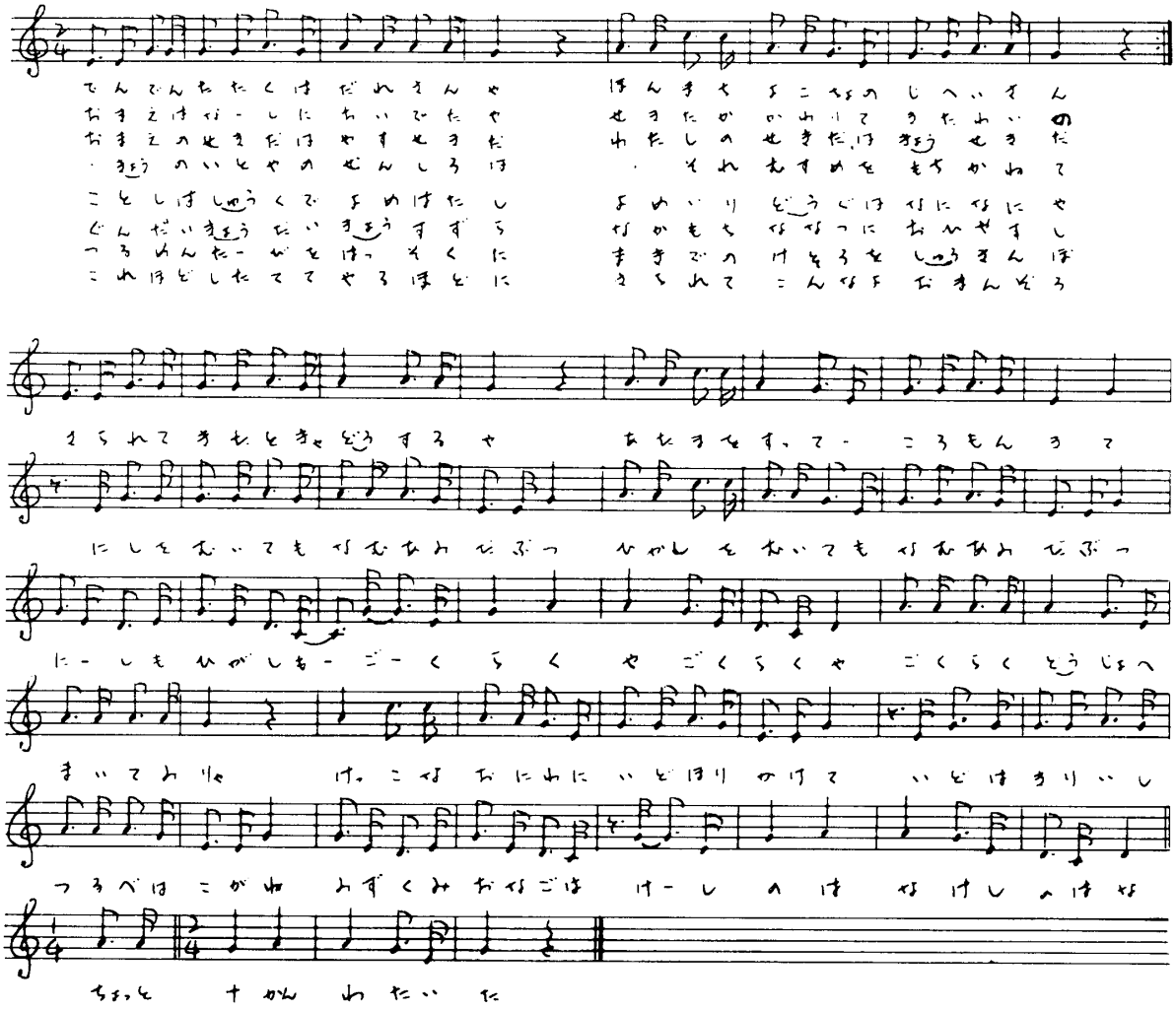
楽譜2≪いさや若い衆≫

（出発音の実音ニ　速度M.M.112　採譜者高木）



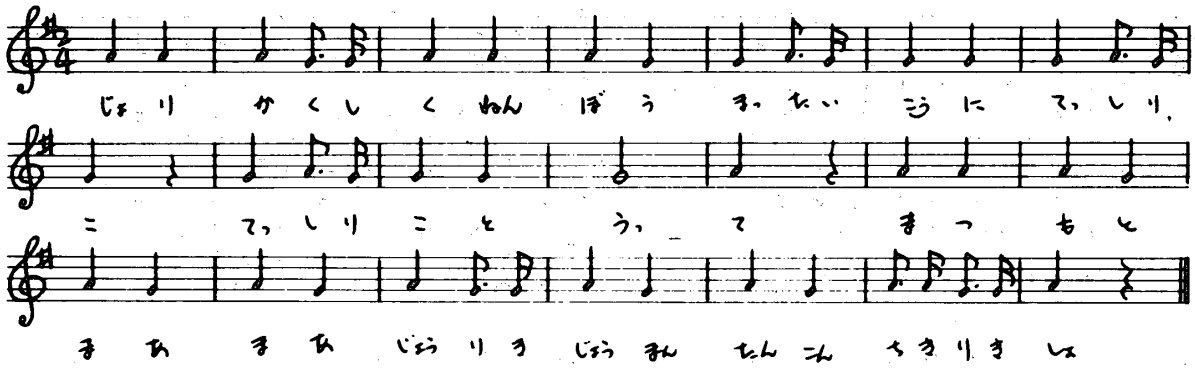
楽譜３≪でんでんたたくは≫

（出発音の実音ホ　速度M.M. 96 採譜者小川）



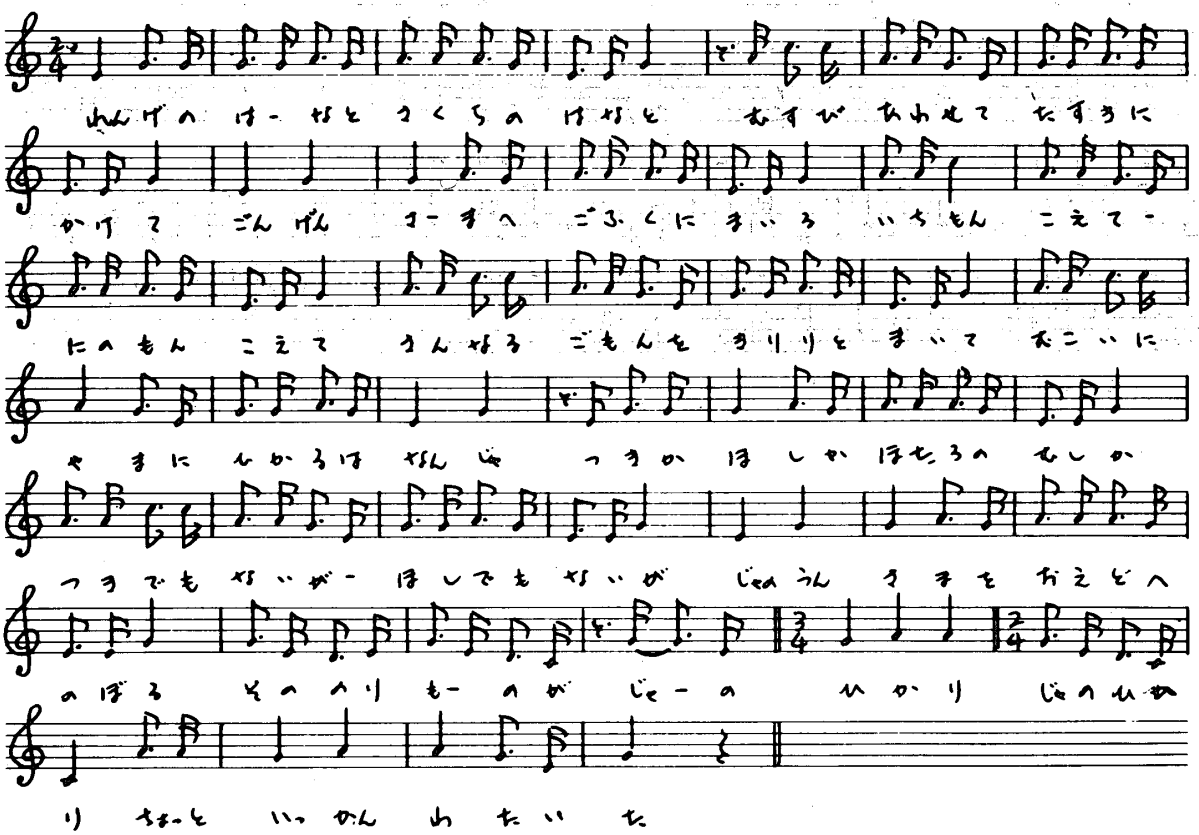
楽譜4≪じょりかくし≫

（出発音の実音イ　速度M.M.120 採譜者小川）

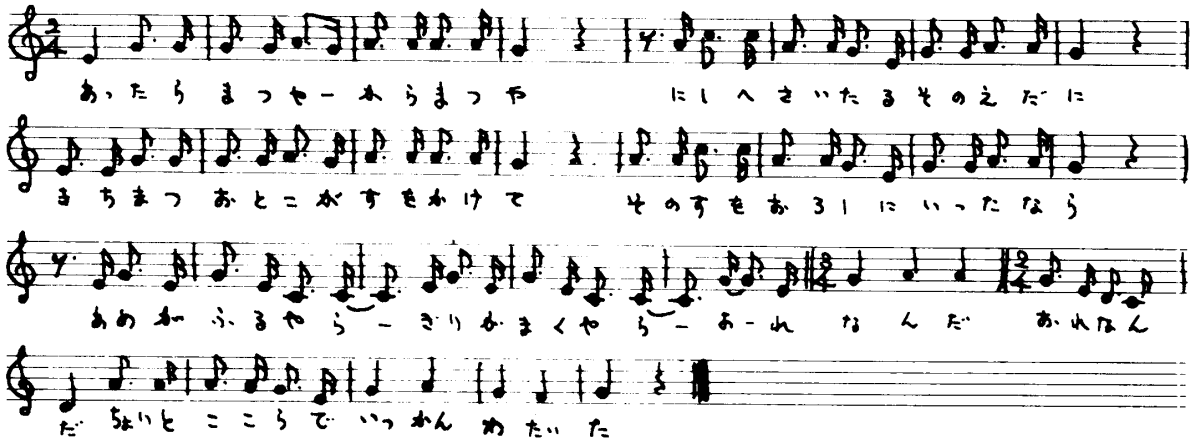


楽譜5≪れんげの花と桜の花と≫

（出発音の実音ホ　速度M.M.138 採譜者小川）

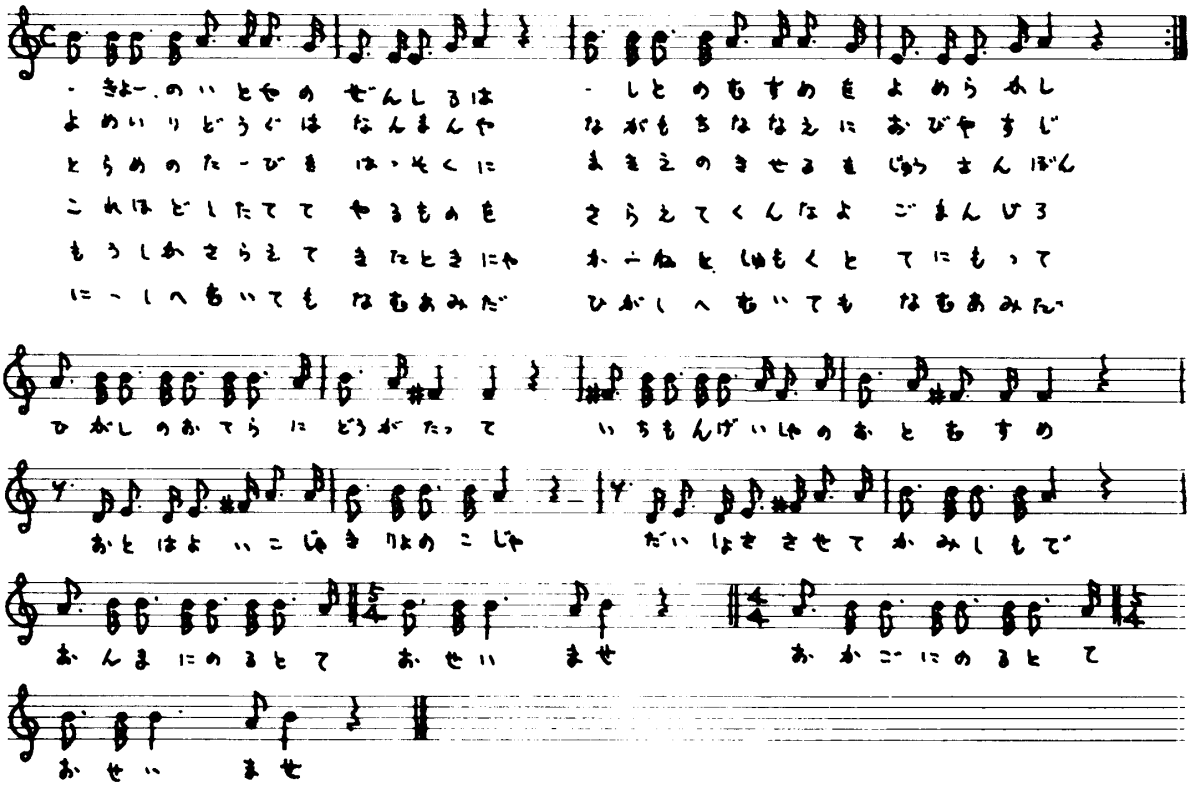


楽譜６≪あったら松やから松や≫

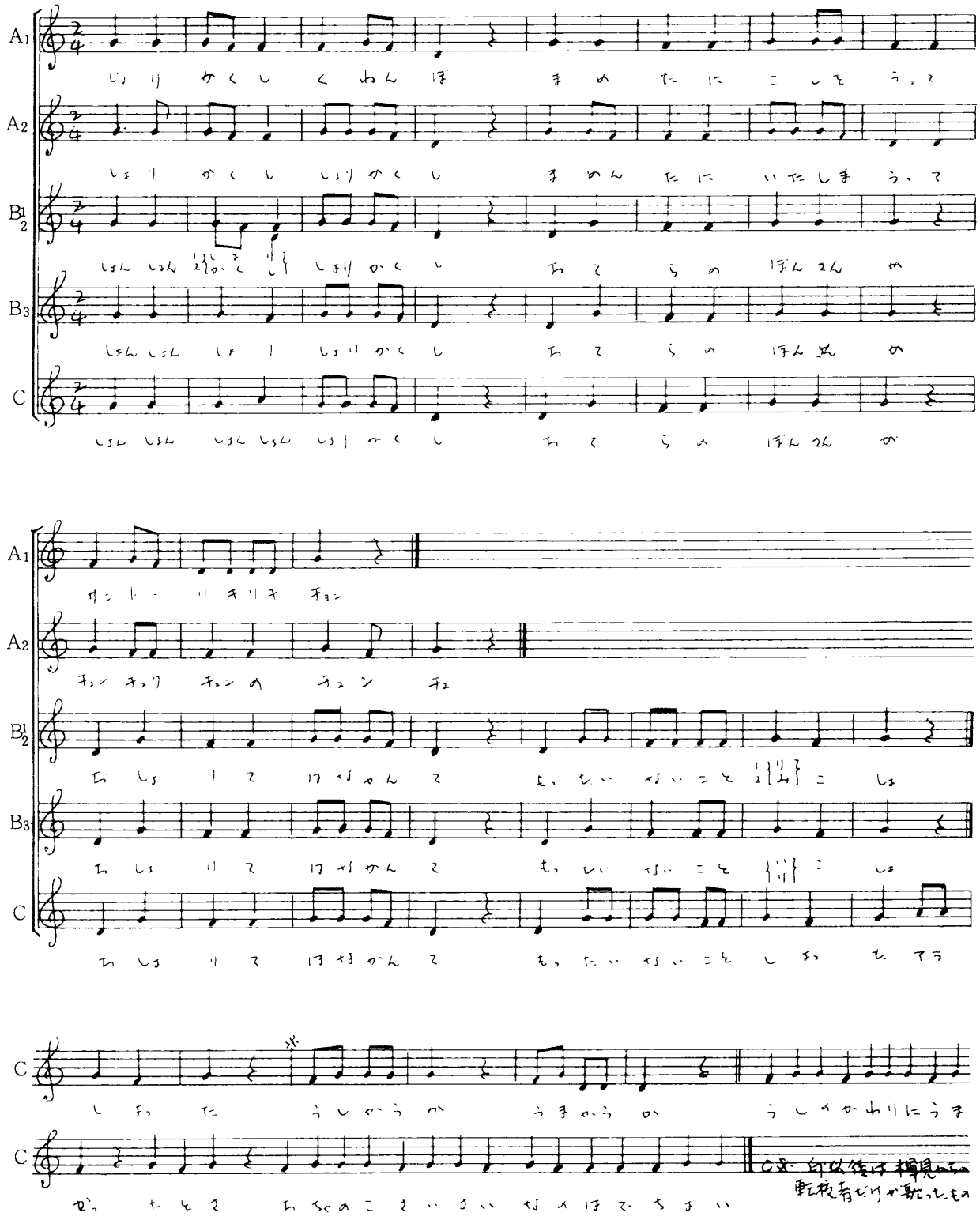


楽譜７≪京の糸屋の善四郎は≫

（恵那郡加子母村　田口喜美枝　採譜者高木）



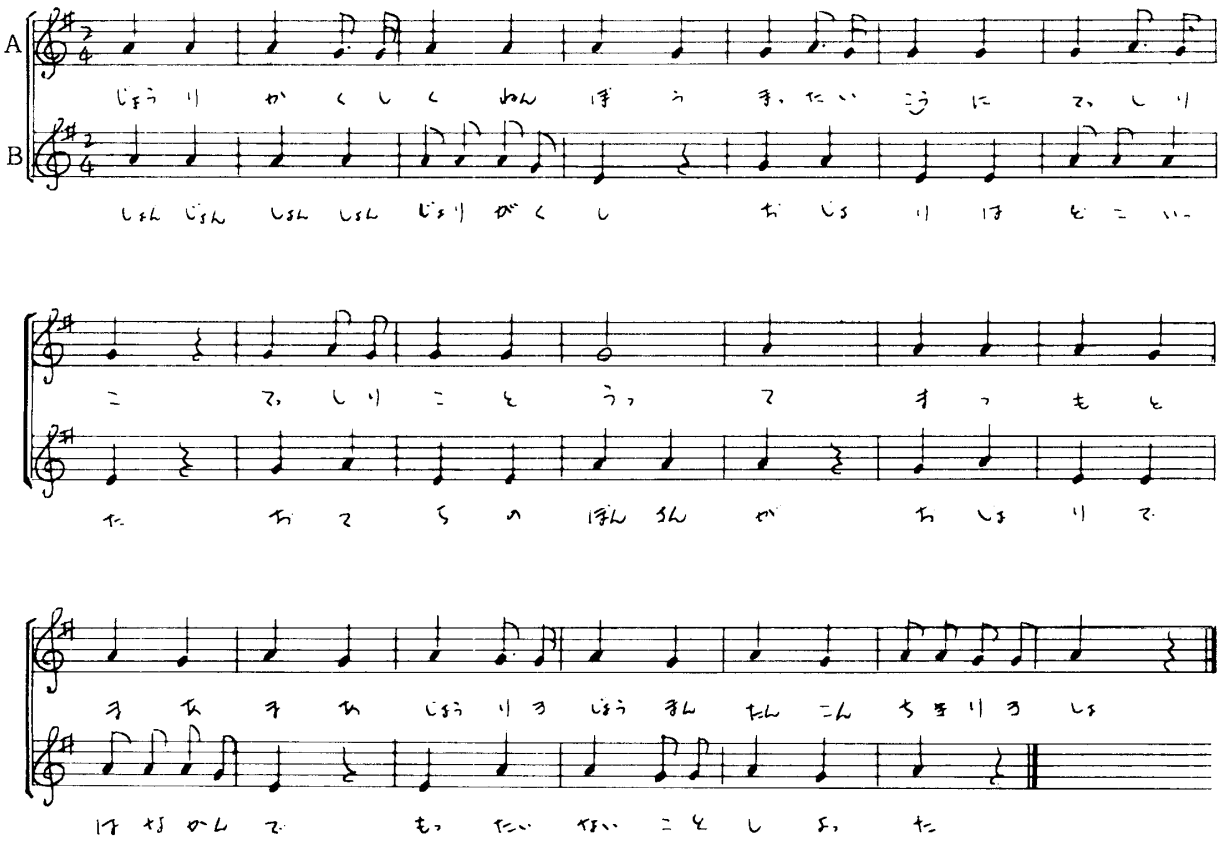
楽譜8≪じょりかくし≫



A1：塚　　B1：戸入　　B3：本郷

A2：櫨原　　B2：山手　　C：門入

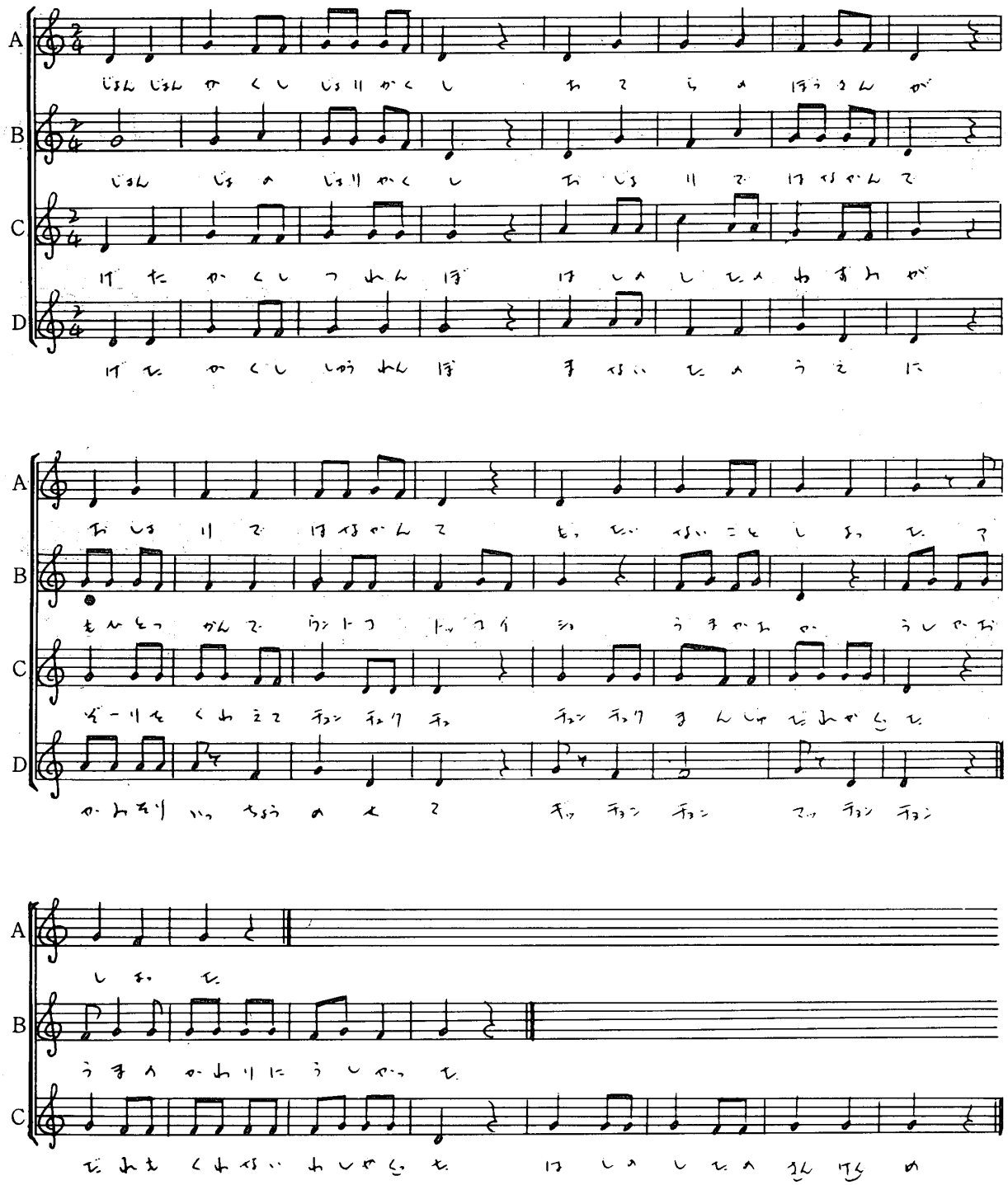
楽譜9 ≪じょりかくし≫



A　：　本　郷

B　：　門　入

楽譜10



A　：　岐阜市

B　：　名古屋市

C　：　東京都文京区

D　：　島根県簸川郡

Ｖ　昔話の採集報告

徳山村の昔話採集の意義はまず第一に，未採集の昔話の採集である。徳山村の昔話に関してまとまったものとして，徳山小学校編の『とく山のむかし話』（1970年８月28日）・『続，とく山のむかし話』（1972年３月10日）・『徳山村史』などの文献がある。その他，岐阜県の昔話と記してあるだけで採集地や採集者・話者が不明であったり，再話された資料がいくつかある。しかし未調査の地域を残しており，発掘されていない昔話が多いと予想される。

第二に，すでに報告されている昔話の再調査である。例えば，今回，戸入で採集された「山姥のはなし」（話者・山本花枝）は，『とく山のむかし話』や『徳山村史』に，「弥宗佐と山婆」として収録されている。しかし，それぞれ差異があり，再調査することにより伝承文芸としての特質をみることができる。

第三に，ダム建設のため，村が湖底に沈むことは時間の問題となってきている現在，村民が各地域に転居し，昔話の継承が大変困難になり，また調査も困難になると考えられる。そのため，早急に採集する必要にせまられているのである。

＜昔話の採集地域＞

今回の昔話の採集地域は，徳山村戸入（1978年９月15日・16日）と，徳山村本郷（1978年９月16日・17日）を選んだ。両地域を選んだ理由は，過去の調査・研究の結果，戸入が関東の文化の影響，本郷が関西の文化の影響を受けているということが明らかになっており，それを確認し，比較研究するためである。

＜整理の方法＞

(1)　本報告の昔話の配列は，採集した地域別とした。

(2)　本報告の昔話はすべて調査時における録音テープから翻字したものである。

(3)　本報告の昔話の題は，話者または報告者がつけたものである。

(4)　それぞれの昔話の後に，『日本昔話名彙』（柳田国男監修・日本放送出版協会刊）と『日本昔話集成』（関敬吾著・角川書店刊）の話型を示した。それぞれ「名彙」・「集成」と略した。

(5)　それぞれの昔話の後に，その話の話者名を記した。

(6)　それぞれの昔話の後に，注として方言や説明を要するものを記した。

＜徳山村戸入で採集した昔話＞

1.　和尚さんと小僧さん(1)

お寺があって和尚と小僧がおった。ほったら，おす[(1)]しをもらって戸棚の中へ入れといた。

ほしたら小僧がな，和尚ばっこ[(2)]ら，こら，これを見せると和尚が大方に食べちまうや[(3)]ら。これを食べ

たいと思ってねえ。ほして，ちょっと食べてみたいと思って，それをつまんで食べたらとってもおいしい。

「こりゃ，まあちょっと」

「まあちょっと」

と，みんな食べてしまった。

「こりゃ困った。おすしをもらったことは和尚さんが知ってござるし，こりゃ困った」

と，それから考えてね。

それを，その，ちょっと残ったやつを地蔵さんの方へ落していったんや。ちょっ，ちょっと，だいこんや麹やらを。そして大きな地蔵さんの口のところにも，ちゃあーと，おすしをつけておいたって。

そして和尚さんが，

「おとなりからいただいたおすしを食べようかな。だしてくれ」

ちゅうや(4)ら。それで，

「はぁーい」

ちゅうて戸棚を開けると，ないわなあ。自分で食べたんやで。

そしたら，

「あらぁ，和尚さん，尚和さん。えらいこっちゃ，えらいこっちゃ。あのおいしそうなおすしがのうなってまった(5)。盗人（ぬすびと）が来た」

「だれが来たんじゃろ」

と，いうことでな，

「和尚さん，和尚さん，ここにこぼれとる」

自分がこぼしたんだで。また，

「これはどうもどこやらもっていって食べたにちがいない。これをつけて行かにゃあかん」

というもんで，ほんで，だんだん落ちとる方へ，自分はおぼえとるもんでな，和尚さんと二人でな行ったんやと。そうするとお地蔵さんが口に，

「ありゃ，お地蔵さんが，人を助けるようなお地蔵さんが，盗人をやるとは。こいつ，やったらなあかん」

ちゅうて，ばいた(6)をもってきて，があーんとなぐったんやと。ほしたら，

「くわーん」

と，いうんやて。

「くわんことない。くった」

また

「くわーん」

って，なる。そして一番しまいには，

「強情なやっちゃ」

って，たたいて谷底へたたきおとしてまったって。まっころけのはなしよ。

（名彙「和尚と小僧」
集成535「餅は本尊様」）

話者　山本花枝

注

(1) おすし＝おすしって徳山ずし。大根を千切りで，それを塩でもんで，水がでるわねえ。たくさん。ぎゅーうとしぼってあげといて，ほんで，魚を，さばとかさけ・ます，それを塩出しで三日ぐらい水につけておいて，塩をちょっともないようにしてまって，さけ・ますなら切って，さばなら背なかが割れておるでしょ，あれは。ほして，水切っといて，塩けがちょっとものうなるまで水につけておいて，それからそこへ，ごはんのあついやつを炊いて，ほして麹とごはんとだいこんとをまぜて，その背中からつめて，何本でも。そして一と月や四十日ぐらいおくとおいしいな。ようつかって。そんなことをいうと下（しも＝町）の人はくさったというわ。おすしを四十日もね。青笹の葉っぱや孟宗竹の皮とかをゆでて，きれいに洗って水を切ってのばして，上にして，わらを三つ編にしておけの大きさにして，そこへ入れて押しぶたを一つのせて石をのせて，まあちょっとで食べるようになると，五・六日前からおもしをゆるうしておいて，今度食べる時は，それをさかさにして，汁をすっかり切って，そうするととてもおいしいよ。麹の味がついて。　（話者－山本花枝）

(2) ばっこら＝ばっかり

(3) 食べちまうやら＝食べてしまうだろう

(4) ちゅうやら＝と，いうだろう

(5) のうなってまった＝なくなってしまった

(6) ばいた＝丸太

2.　和尚さんと小僧さん(2)

お寺では，法事とか人の寄る時，ごはんをようけ(1)炊くこともあるわな。ほんで和尚さんがな，

「もうしゃべっとるのはめんどくさいで，おれが指を二本，こう出したら二升炊け。三つこうやったら三升炊け」

って小僧にそう言ったんじゃって。

そうしたらその小僧は，和尚を困らせてやろうと思って，便所場へ行って，便所場の板をちょっと登ると落ちるようにしておいて……小僧は悪い奴っちゃな。そしてだまって知らん顔しておかってやっとるんや。

そして和尚さん，お便所場へ行ってな。そしたらばりばりって落ちてしまった。

「やーれ，小僧来てくれ。小僧来てくれ」

って，十本の指を開ろげたんやと。そしたら小僧さんは，

「あゝ，よしよし，はい，はい」

言って，お米を一斗かして，そして大きなお釜で炊いたんやと。

そのうち和尚さんがやっとはい上がって来て，うんこだらけになって，

「なんじゃ，小僧め，おれが助けてくれ，助けてくれて言ってなやっても，よしよし，はいはい言って，行ってしまったやら」

と，怒ったら，

「和尚さん，和尚さん，わしゃ和尚さんの命令通りにしたんやでな。二本だしたら二升炊け，三本だしたら三升炊け。和尚さんは，いやあって十本の指をだしたから，よっしで，十斗炊いたんや」
って。それで和尚さん困ってまった[(2)]。問答まけやな。

（名彙「和尚と小僧」
集成530「指合図」）

話者　山本花枝

注

(1)　ようけ＝たくさん
(2)　困ってまった＝困ってしまった

3.　和尚さんと小僧さん(3)

和尚さんが，小僧が何をやってもとんちのいい小僧で，ほなもんで今度は小僧を困らせてやろうと，和尚さんがね。

「おまえは，何でもおれの言ったことを解くが，今度言うことはどうやしらん，何じゃ」
って，

「和尚さん，和尚さん，何でございます」

「うたんたいこに，なるたいこ，そでふりだいこに，しゃにかみだいこ，これを作ってみよ」
って，こう言った。困ったな，小僧もそれは。

「うたんたいこ？　うたんたいこになるたいこ。ああ，いつやらどこやらに蜂の巣を見つけてあるでな，ほんで，あれを中へ入れると，打たずにぶんぶんぶんてなくし」
ほんでそれで考えた。それであの蜂の巣を，みんなとってきて，ほしてたいこを破って入れて，ぴーんと，和尚さんにわからんようにはじけてまっとくと，ほんでよかろうと思って，小僧がやったんわやな。

常にそこらへんをうろうろするうちに，蜂の巣を見つけてあったの。そして，その蜂の巣をとって，その中へ入れて，うまいこと，ぶんぶんぶんぶんって，こうなるんだわ。

「こりゃうまいや，ほんでもこれは出来たが，そでふりだいこにしゃにかみだいこが，これまたむつかしい」
と，思って，ほうして思っとったの。ほしたら，

「こりゃどうしたらよかろう。ようしこりゃ和尚のそばで，たいこの中を破ってやろう」
と，こうまあ思ったんやなあ。

そこで和尚さんが，

「できたか」

「できました」

「ふーん，そりゃうまいこと考えたなあ」
と，和尚さんは誉められたわ，そこでは。そして和尚さん，

「それはできたけれど，うたんたいこはできたけれども，その，そでふりだいこにしゃにかみだいこっていうのが，わからんじゃろうな」
そしたら小僧は，
「和尚さんちょっと待ってくれ」
って，そこを切れものをもってきてざぁーっと破ったら，蜂がぶぁーっと出てきた。そしたら和尚さんは顔をしゃがめて[1]，衣の袖を振り切るほど振った。
「それ，和尚さん，そでふりだいこにしゃにかみだいこがそれでございます」
これにはまいったわ。まっころけのはなしよ。

（名彙「和尚と小僧」／集成524「打たぬ太鼓」）

話者　山本花枝

注
(1) 顔をしゃがめて＝顔をしかめて

4. 和尚さんと小僧さん(4)

和尚さんがな，小僧をつれておよばれ[1]に行ったんじゃと。ほって，そこにごっつ[2]おをお重に入れて幾つも幾つもおかって[3]の方に置いたった。
そして小僧にな
「ちょっと，ちょっと，あそこにお重が座っとるが，あれは，上に何が入っとって中に何が入っとって，一番下に何が入っとるってことがわかろまい」
「まあ，そりゃ，まあちょっと[4]考えさせてくれ」
ちゅうて。それで，そんなりでみんなとしゃべっとってね。そしておしっこに行くようにそうっと出て行った。
そして，そこの女中さんに聞いたんじゃて。
「これは何が入っとる」
って。そしたら，
「中には何が入っとる。下には何が入っとる。上には何が入っとる」
って。もう聞いてまった[5]でわかってまった。
それから行ったら，和尚が，
「どうじゃ，小僧わかったか」
「はい，わかりました」
そしたら，
「何が入っとるんじゃ」
って。そいつはわかるまいと思って和尚も言ったんじゃな。自分も知らずに言ったんだ。困らせるとて，言ったんじゃな。そして，

「あれは和尚さん，何が入っとってその次には何がある。そのまた次には何が入っとる」
と，言ったんじゃ。そりゃそうじゃと思ってな，和尚さん。
「本当にわかっとるのか」
「わかっとる。和尚さん，論より証拠。蓋を取って見せます」
とうに聞いてきといて。
「感心じゃなあ，おまえは」
って，またそこで誉められたんじゃ。ただこんだけのおはなしよ。まっくろけのはなし。

（名彙「和尚と小僧」）

話者　山本花枝

注

(1) およばれ＝食事に招待されること。
(2) ごっつお＝御馳走
(3) おかって＝台所
(4) まあちょっと＝もう少し
(5) ～まった＝～しまった

5.　ぐたとかめ

あるところに，ぐたとかめという名前の人があったんやわな。男の人の二人だけ住んどって，
「これはまあ，お祭が来たが，なんじゃなあ，あれやなあ。何かわしらも男衆やで。かわったごちそうようしんで，甘酒ぐらい作ろうか」
という話になったんじゃわなあ。麹作ってな，甘酒作ることにしといてね，そしといて，甘酒をこんなかめの大きいやつに作ったんじゃて。二人で。
二人で作って，甘うなったらな，みんなで知らんうちにお祭り前に飲んでまっちゃあかんで，
「高いとこにつるけ(1)とこ」
思て，ほてつし(2)の高いところへな，こうやって，その縄をけつにかけて，しばってつるけたんやて。
ほて，
「まあ，どうやなあ，こりゃまあ，飲めるようになったろうか」
って，二・三日後に，
「いっぺんかげんみてみよか」
ということで，お祭も近々きたし，まあ，そんで，
「飲めるようになったろう」
って，ちょっこかげんみたりゃ。
「まあ，こりゃ甘い」
って，ほりゃとても甘うなってようできとるで，ほれから，
「ほんなら，こっからおりょしょうか」
っておろして，

「わかして飲んでみようか」
ということになって，ほんで，かめっていうのが下におって，ぐたというのが上へ上がって，
「ほうかほうか，ほんなら手で受けよ」
って言ってな，そんな遠いところじゃなかろうで，高いとこじゃないでね，
「ええかげんに手で受けよ」
と言ったんじゃて。そしたら，
「よしよし」
てって，かめが，自分のけつをかかえてるんじゃて。
「おい。しっかりもったか」
「ああ，もったもった」
かめは，自分の尻をもっとるんじゃて。
「しっかりもったか」
「かめのしりをもったか。つかまえとるか」
「おお，つかまえとる」
とこうしとるんだて。
「よし」
というもんで，ポツンと切ったらそしたらブゥーンと割れてしまった。
そしたら，こんどかめでも大きい割れたんと，小さい割れたんとあるでな，そのちょとした。
「うん，しっかりもっとったのに」
「自分のけつばっかもって，かめのけつを持たんもんでほんで」
ぐたにおこられた。そしたら，割れたものはしよない[(3)]で，これで，かけたとこでな，かけたこんなちょっと深いようなとこがあるでな，ここへちいとずつたまったやつを寄せてな，ほして，かなおに，いろりで炊いたんやて。ほしたら，その火をたって，ぐたに頼のんだんじゃわ。熱うなって煮えたのをさまして飲むとよけいうまいでな，ほんで，
「わいたら知らしてくれよ」
と言っといて，かめはどこやら，ちょいと出たんやわ。
ほしたら，ぐたが，こうやって火をたいて甘酒をわかしとるんじゃて。ほしたら，グタグタグタてわくじゃろ。ほて，こんどは，
「うふん。ふん」
ってってもまんだ，グタグタグタグタとわくんじゃと。甘酒やで。おかいさん[(4)]みたいにな。わくもんで。
「まんだ返事しても返事してもまんだグタグタ言いやがる」
って灰を，いろりの灰をサーと入れて，まんだ灰を入れてもまんだグタグタ。またつかんで入れて，しまいには飲めんようにしてまって，かめが戻って来た時分にはな。
「甘酒は」

「甘酒のやろう。ぐたぐたぐたと呼びやがって，それで腹が立ってきて，まあ，飲めんようにしてまった」

んやて。

それで，まっころけのはなし。

（集成 334「瓶の尻」）

話者　山本花枝

注

(1) つるける＝つるす
(2) つし＝竹簀子で張った屋根裏の物置場
(3) しょない＝仕方がない
(4) おかいさん＝粥

6. おをうむ女

ある所にな，若い人がおってな，先に嫁さんがあって，その人は緒を作って着せてたんやて。だんなさんに。

そうしたら，ある女が入いっていて，

「そこの嫁さんは緒をうんでも，下手で細太ができるって評判じゃ。細太ができるのでわしを嫁にもらってくれると，きれいな布を編んで着せるが」

ってこう言ったんやて。

「そうも上手に反物を作ってくれるなら，あれを追い出してしまってな，お前さんに来てもらおうかな」

ということになって，その人を追い出いてまったんやわな。それは，かなり緒をうんでやってくれたのに。

後から入ってきた嫁さんがな，毎日，仕事から主人が戻ってくると，玉をな，うんだ玉を糸玉をな，つしへ，

「今日もてんまるーつ」

っていっちゃポイと投げてあげるじゃと。ほしてまたあしたも，

「てんまるーつ」

って投げて上げるんじゃと。

「まあ，ここのこんどの新しい嫁さんは，よっぽどつしに，あれしたるじゃ」

と思って上がってみたりゃ，たった一つしかないんじゃて。十日も二十日も投げ上げたやつが。

「いつ反物にしてくれるかしらん」

と思ってその人は待っとったら，ある日のこと登ってみたら，

「よっぽどここに糸をためたる」

と思ってみたりゃ，たった一つころがっとるんじゃて。

そしたら怒ってまって，

「毎日毎日糸を作って上げるんかと思ったら，たった一つしかない。どういうこっちゃ」
ということで，よそのやつを借りてきたかもらってきたかどやして一つやで。ちょっともようやらんのじゃわな。

ほんで，こんどお祭がくるんじゃが，お祭に着て行くもんがない。

「おまえ，ええやつ作って着せるってうそついて。細太でも何でも着せてくれたのに前の嫁は。それにお前は，ちっとも着せてくれんし」
ってって，

「だまされてしまった」
っておやじがいうんじゃて。

ほして，祭にも，夫婦やで，気の毒だで，

「祭に連れてってやりたし」
ってってな。

「なら，わしをかめの中にでも入れてな，はだかじゃで，ほんで連れてってくれ」
ってって言った。

ほんならせたにかめをつけて，かめの中に入って，その嫁さんははだかやで。何にも着るもんないで。

はだかで入っとって，お祭に背負って祭場へ行ったの。

行ったら，そしたら祭のにぎやかいもんで中に入っとってもみたいもんでな。ずっとふたをとってすかして見たんじゃと。ほしたら，そこで昔の嫁さんがそれもお祭に行ったんじゃな。ほしたら，

「ありゃ。てて，みてみよ。昔の細太がおるわ」
ってって言ったんやと。そしたら，しゃくにさわってきてな，そのおやじは。

「細太も着るこそよけれ，かめかじけ」
ってって，せたごとバァーンと投げたって。

ほったら，はだかんぼうで，前に手をあてて逃げたってさ。

それ，まっころけのはなし。

話者　山本花枝

7.　山姥のはなし

むかしむかし，ある所にな，嫁さんをもらったんやけど，その人が，ごはんを食べんのじゃと。ほって，

「なんでごはん食べん。ええ嫁もらった。こりゃ仕事はようしるし，ごはんを食べんでええ嫁じゃ」
思っとったら，ほしたら，

「おかしい。わしが行ってから食べるのやどうじゃしらん」
ほったら，出て行ったふりをして，つしに上がってな，そこの目から，こもあみなわのすきから見とったんじゃわな。

そしたら，もう山へ仕事に行ったと思うもんじゃでな，そして，ごはんを大きい釜に炊いて，そう

しといて，頭をわけて，ほして，みんなごはんを，もう頭ん中へ入れてしまうんじゃと。

「こりゃけしからん。こういう化けもんじゃ」

と思ってな，どうも不安に思いだいたんじゃわな。

そうしたら，その嫁さんがな，ふりがちょっとおかしいもんで。そのむこさんが，ほんじゃもんで，

「これは，どうも見ぬかれた」

っていうことに気がついたんやわな。ほんで，

「ひまをだす」

って言ったんやな。

「ひまを出すで，行ってくれ」

っていったんやな。ほんなら，

「ここのうちの中で，お前の欲しいものは何でも，いりようなものをな，やるで出てってくれ」

って。こわいような気持になったもんでな。だんなが。

ほしたら，

「やっぱり，見ぬかれたかしらん」

と思って，

「ほんなら，あそこにすわっとる，つけなの，みそのおけを一つもらいたい」

という注文なの。

「ああ，あげるあげる。何でも持ってってくれよ」

こおなってまったんや。化けもんやで。

「何でも持ってってくれ。長の別れやで身体を大事にしてくれ」

そこで別れを告げて，大きいのをしょってでかけたんやと。

「これはどこへ行くんやろ」

不思議に思って，

「どこへ持って行くんじゃろ」

と思って，かくれてついてったんやげな。かくれがくれついて行くと，そうしると，高いとこから見とったらな，男の人をな，

「わたしのあとをついて来る」

というので，そのつけなおけの中へパアーと入れたんじゃと。

ようでんもんやで，おばれて[1]，よっとこよっとこ，よっとこと山の方へ登って行くんじゃと。

「まあ，これはえらいこっちゃ。今夜は食い殺されてしまうんやが，どうにもえらいこっちゃ。今日は生きて戻れん」

と思って覚悟しておばれて行くんじゃな。ほしたら，岩の大きいとこに休んだって。おけをおろして。そしたら天から褌が下がってきた。ひもがな。おけの上へ下がってきて，

「これはありがたい。助かる」

と，それにしがみついた。山んばは知らんもんで，それをまた，

「休んだら軽あるい。休んだら軽あるい」

って，ほして，また背おって出て行くんじゃて。ほして，今度は自分の住(すみ)かへ行ったんや。

「おーい子どもよ子どもよ。えものをとってきたんやで，今夜はごちそうしてくれるじゃろ」

ってこう言って，入って行くんじゃて。そのまた男の人はそおっとついていったんじゃて。

「どういうことじゃ」

と思って，見えんように。

「見られたら，えらいこっちゃ」

と思って，ほーしてだいぶ見えんようなると，ちょっと歩いてな，ついていった。

そしたら，

「今，ごちそう取ってきたで，今夜，お前らにごちそうして食わせるぞ」

と言っててよ。子どもが待ちうけとるんじゃて。そして置いてみたら，おらんじゃろ。

「ありゃ，こりゃ逃げられた。どういうこっちゃろ。この中に確かに入れたのに，ありゃ，休んだ時から軽うなったが，その時にどうかして出たんかしらん」

と思ってな，

「よしよし。子どもよ子ども。今夜はお前らにごちそうを食わせようと思ったけど，それが出来んで，こんだ(2)くもになっていって，今夜はくもでつかんでくるで」

ってな，くもに化けてってな，

「その男をとってくる」

って。そしてそれを聞いたんじゃ。

それから家(うち)へ飛んで戻って，今夜は親せき衆にみんな寄ってもらって，いろりでたきものをよせてきて，ほして，どんどん，どんどんと，たいとったんや。

それを聞かにゃ知らんで，それを聞いたもんで，たいとったらそこへくもの大きいのになって，つらつらーと下(おり)てきて，相談決めたったもんで，

「それっ」

って言うもんで，火の中へブェーとほうりこんで。燃える火の中へ。

そしたら，やっぱりそれが山んばで，ダァーと山んばになって，のびた。山んばたいじはしたんやよ。まっころけのはなし。

（名彙「食わず女房」
集成 244「食はず女房」）

話者　山本花枝

注

(1)　おばれる＝負う

(2)　こんだ＝こんど

8. 大蛇のはなし

昔な，ねらんべ(1)えがおったんじゃと。そしたらそこへ男らしいがっしりした侍が，毎晩毎晩通ってきだいて(2)な。だもんで，そこのおっか(3)がな，

「どうも毎晩毎晩お前のとこへは若い衆が通ってくるけどな，氏・素性のわからんもんをな，相手にして，そしてまた子どもでもできたりなんかするとな，めんどうなことになるでな，所や，どこの者(もん)じゃ，ということを今夜来たらはっきり聞いとけ」

と言ったんや。そしたら娘が，その晩に侍が来たもんやで，

「どこのもんじゃ」

て聞いて，

「遠いとこで山ん中の方から来たんじゃ」

っていうだけで，所をいわんのじゃとお。ほれで，母親にな，昔の娘は素直じゃったでな。それで，

「どこのもんじゃとも言わなんだ」

って報告したんじゃと。そしたら，そりゃどうも，所いわんてのはあやしいでな。昔は着流しでなかなか粋な格好しとったわな。ふきでもこの位なふきでな，綿をズーと入れてな，この位の着物，着とったんや。ほんで，

「おいえきたらな，着物のつまのふきのとこにな，糸玉に針を通して，しくしくつまんでぬいつけとけ」

って，

「ほうしるとわかるでな，そういう風にしてみろ」

って言ったんじゃ。

ほいて，またその晩も男が来たもんじゃで，言われた通りに帰る時にな，つまんでしくしくとぬってな，そのまま帰した。

朝になってみると，あまつだ(4)れのとこからポタリポタリと血がなたれとるし，そして，糸玉が長いもんやで，糸玉のあとをズーとこうやっていったら，山の中の方へ入って行ってな，そして岩谷の崖(がい)のとこがあってな，そこに

「えらいこっちゃ」

って言いしな(5)に苦しみもだえるしなにうなっとるんじゃしな。男がな。ほしたら母親らしいもんが話をしとるんじゃってってな。何をいうしらんと，岩かげにこうやって聞いとったんじゃな。そしたら，その母親がいうことには，

「わしが，いつもかも人間を相手にしちゃあいかん。人間は，わしらより賢いんじゃでな，人間だけは必ず相手にするなよってゆったのにな。それにお前は人間の娘のとこに通っていってな，こういうひどい目にあうんじゃが，親のいうことを聞かんもんやで，罰があたったんじゃぞよ」

ってってな，話いて聞かしとるんじゃてえ。

そしたら，若い衆がな，

「えらいえらい」

とうなりながらいうことにはな、

「いやいや。わしゃちゃんと仇うちを必ずしるって。今まで，こうやって仲ようつきあっとりゃ生むことも教えるけども，わしの子どもがあれん中に入っとるんやで。ほれでそうなると生むことも教えてやらんでな。それであれば，やがて時がくると，わしの子どもがはらん中で大きゅうなってな。そして腹を食い破って出てくるんじゃが。そうしると，あれはもだえ苦しんで死ぬんじゃで。腹を噛み破られて，子どもに。それで仇うちはできるんじゃで大丈夫じゃ」

って言ったんじゃて。そしたら母親がな，言うことにはな，

「人間はかしこいでな，あきゃせん。三月の桃の節句には桃酒をして飲みな，それからまた五月五日の端午の節句にな，しょうぶ酒をして飲む。それからまた，九月の九日の節句には菊酒をしてな，飲むとな，みんな下ってまうでな，ほんでそういうものは人間の方が賢いで仇うちにはならん」

って，話いたんやと。

それでな，親子がびっくりしてな，それから三月三日には桃酒を飲みな，五月五日にはしょうぶ酒をして飲み，九月九日には菊酒して飲みして。

そしたら，やっぱし腹が痛(いと)なってな，下るということで，蛇の子がでてくると大変じゃというので，いかいいか(6)い釜にな，湯わかいてな，ここのゆる(7)いじゃとても間に合わんもんやでな，とだ(8)いに釜をついてな，いかいいかいはたそ(9)りに湯をはってわかしとったんやと。

たわら(10)いの中がなへっ(11)びのくだったやつを入れてな，ためちゃにえ湯を一つ一つたわらににえ湯をな，ダーダーとかけてな，へっびを殺いちゃ捨て，またいかいやつにへっびを生んじゃいけとってな，またそいつに熱い熱い煮え湯をダーとかけちゃ殺してな，七たらい半生んだんじゃってな。ほいで，七たらいまで煮え湯がグラグラしとるんじゃが，いかいはたそりにしても湯がたらんようになってまってな，半だらいにかける湯がのうて，

「まあ仕方がないわ」

ってそのままこうしてあけてすてたんやて。そいつが今おるへっび，半だわらのへっびやと。

それでな，五月五日には笹巻きをするやろ。その笹巻き，実だけ食ってまってな，皮だけをな，また，ぐるぐると元通りにしてへびの魔よけ，へびがち(12)びを取りにくるで。

そうしると，へっびがな，

「ここの家はよっぽど偉い者(もん)がおるにちがいないで，ここの家(うち)にははいりにこない」

それで，ああやって，ちまきをさかし(13)まにするの。

まっくろけのはなし

（集成　101A「蛇聟入芋環型」）

話者　増山たづ子

注

(1) ねらんべえ＝娘
(2) きだいた＝来はじめた
(3) おっか＝母親
(4) あまつだれ＝あまだれ

(5) いいしなに＝言いながら
(6) いかい＝大きい
(7) ゆるい＝いろり
(8) とだい＝家の前の庭先
(9) はたそり＝大きななべ，はそり
(10) たわらい＝たらい
(11) へっぴ＝へび
(12) ちび＝つばめ
(13) さかしま＝さかさま

9. おとぎり草のいわれ

おとぎり草の根をみますと血のように下の葉っぱはなっています。あれは，江戸に将軍家に仕えている有名な鷹師がおりましてな。そして，やっぱし，いつの時代でも両派別れてにらみ合いやっとったものとみえまして，鷹師でもいろいろな方がありまして，お互いに，

「うちの方が上手に鷹をうつ」

「うちが上手だ」

と言って対立があったわけなんですね。

ところが片方の鷹師の人は，やっぱし鷹狩りですから獲物にやられて来るということもあるでしょう。ほんで，その鷹が傷ついてもすぐに鷹が傷口が回復してすぐに使えるというようなのがありましてね。それには傷口に何を使うかということを，これが一つの秘密になっとりまして，相手に教えると相手が習うというわけでな，ほんでそういうようなことで秘密にしとったんや。

そしたら向こうの，片方の人が，

「何とかして秘密をぬすみだしたい」

というのでね。自分の妹を使いましてね。妹が非常に美人な妹さんであったとみえまして，そして，そのまた片っ方の方の鷹師には弟がおりましてな，かわいい。そして，色仕かけで妹にさぐらせたわけなんですよね。

ところが，男なんてものは，しっかりしているようで，女にはおろっとするようなところがあるで，そんで油断して，

「これは絶対しゃべるなよ」

ということで，相手方の妹に，

「じつは，おとぎり草（この時はまだおとぎり草と名付けられていなかった）で，こういう黄色い花の咲く草花を，こうして刻んでにて，その汁で傷口を洗ってね治すんだ」

ということを話してしまったわけなんですよ。そんで，向こうの人が，そういうことをやりだして，そして，どんどん鷹の傷口が治ってということで，非常に兄が怒りましてね。

「お前のおかげで秘密がむこうの敵方に伝わった」

というんでね。弟を切ったということで「おとぎり草」という名がついている。

だから，おときぎり草の根元には，その時の血がにじんでいる。

話者　増山たづ子

<徳山村本郷で採集した昔話>

1. へたきりしずめ

おじいさんとおばあさんとおってな。ほっておじいさんは山へしば刈りに行き，おばあさんは家でせんたくをしておったのよ。

ほったら何やでせんたくしてのりつけてしとったの。そしたらのりをな，しずめ(1)がななめてまったんやと，そうしたもんやで，おばあさんがへた(2)切って逃がかしてやったんやと。しずめのへだを切って。

そうしたもんやでね，おじいさんが帰ってきて，

「しずめ，しずめ」

「はちのりねぶった(3)でね，逃がかしてやった」

といった。

それで，家で飼っとったのやなあ，それを。家に飼っとったんや。そのしずめを。そうしたもんだで，おじいさんがやあ，さがして行ったのよ。

「へた切りしずめどこ行った。こっちへこい」

ってなあ，さがして行ったのよ。そして，

「こっちこい，こっちこい」

って言ってたら，

「あの山越えて，この山越えて，来ーい来い」

って言ってよ，おじいさんがよべったら(4)，あの山越えてこの山越えて来たんや。

そいでおじいさんに，しずめが，

「でかぁー箱やらか，ちさぁー箱やらか」

そんでおじいさんがな，

「ちさぁー箱くれよ」

ちさぁー箱もろうてきた。そしたところがな，ちさぁー箱もらってきてな，家で開けてみたら，こがねがいっぱい入ってたんや。そいだもんでな，ばばさがな，

「そういうことならわしももろてこ」

そいで，

「へた切りしずめどこ行った。へた切りしずめどこ行った」

ってよばって，

「あの山越して，この山越して来い」

って。

ほいでな，ばばにゃ，

「でかゃぁー箱やらか，ちさぁー箱やらか」

ちさぁ箱はちさかったんど，こがねがいっぱい入っていたしな。でかぁー箱もらってくると，こがねよけえ入ってるや。そうしたもんやで，でかぁー箱くれた。

でかぁー箱もらってきたところが，あけてみたらきたないんばっかいっぱい入ってた。へんびやまむしがうようよしとったんやと。大きい箱にな。ばばさが欲なもんやでね，よっけ入っとると大っきな箱をもらったでしょ。そしたらね，へびやまむしがいっぱいこやと。いわいね。

ほんでばばさはな，毒なむしにせめられたど。それもしかたないわ，へた切っていじめたやで。

（名彙「舌切雀」
集成 191「舌切雀」）

話者　村山いちえ・北村和兵

注

(1) しずめ＝すずめ
(2) へた＝舌
(3) ねぶる＝なめる
(4) よべった＝呼んだ

2. 肉付きの面

如聖人がな，吉崎御坊にな拮据するんじゃ。そうしたところが，ばばさが欲でな，仕事をよう(1)け言いつけるんじゃ。言いつけるもんじゃでな，早(はよ)から参れんにゃ。ばばさが言いつけた仕事をしてから参れるにゃ。そんで遅うから参るのや。

そうしたところ毎日参る。遅うから。ほいだもんやでな，ばばさはうれしないもんやで，よう(1)け仕事をいいつける。ほっとよけ嫁の参るのが遅うなる。そうしたところがな，

「あいつは極道しとるにちがいない。おれが今度，ちょとおどしたろ」

と思って，面をかぶって山道に待っとったんや。そこへ，その嫁がやって来たんや。そうしたもんでな，鎌を持ってな，

「打ち殺してまう」

ってな面かぶって出てきたんや。鬼の面かぶって。ほしたらな，

「南無陀弥陀仏・南無阿弥陀仏にゃ歯もたたない」

そう言って，平気で通って行くもんやで，ほんでばばあは，

「なるほど，これは真(まこと)の信者や。おれがそれは悪かった。こういうことなら，まっとう(2)宵から参らせりゃよかった」

ということになって，嫁にな，その場で懺悔して，嫁に，

「面をぬいでくだされ」

と，そうしたところが嫁が取りかけたらひっついてまって，離れへんにゃ。そんでそれを無理に嫁がひき離したらな，そんで肉付きの面ていうてな，肉がついたんじゃ。

吉崎御坊って，今でもな参詣者がありますにゃ。

（集成　398「肉附面」）

話者　北村和兵

注

(1)　ようけ＝たくさん

(2)　まっとう＝もっと

3.　かわいのの話

かわいの(1)かな，畑でうり作ったったらな，それを盗みよってな，ほって，そこのおじいさんがな，腕をとったんじゃと。かわいのの。

かわいのは，

「その腕ほしい」

ってな，毎晩毎夜山小屋を，川ってって(2)魚とってきてな，かどに置いとくんやと。そしてしのんつの下げたら，まあこなんで，ほうたらゃー，また，

「手くりょ(3)，手くりょ」

って，

「腕くりょ」

って，ほて，腕やったらやあ，薬をあいすや(4)って，今ではもう，あいすしてくれてな，

「これとこれを飲むとよい」

「これとこれを飲むとよい」

ってな，薬しるようおそえてくれたんや。

ほたら，そこは薬屋やもんでな，

「あいすや，あいすや」って，こないだまでいっとったんや。

その手をもらいたいもんやで，字を書いてやっとった。

こないだまでかわいのの書いた証文あったんやけど焼いてもった(5)。

話者　北村つま・村山いちえ

注

(1)　かわいの＝河童

(2)　川ってって＝川へ行ってきて

(3)　くりょ＝ください

(4)　あいす＝あいすという名の万病薬

(5)　最近火災にあって，河童の書いたその証文が焼けてしまった。

4.　釈迦涅槃のはなし(1)

雀は，お歯黒つけかけとって，お釈迦さまがご涅槃しるというので，そのまま，ふろしきかぶって走ったので，ほんで雀は一夜(ひとや)に巣作ることをな，許されとるんや。

（名彙「雀孝行」
集成　47A「雀孝行」）

話者　北村和兵

5.　釈迦涅槃のはなし(2)

みずひょろひょろという鳥が山にいるんや。その鳥はな，あらゆる動物がな，今日はみんな寄るんやで，みっともない格好してったらあかんで，身体を思いきりやつしとるんやわ。ほいでご涅槃にいる時におくれたんやな。その罰で，水飲(の)もと思うと，自分の体が赤いんで，そいつが水にうつるもんやで，ほんで火にみえるんや。水が。ほんで，うつぶいて水飲むことできんで，ほんで雨ふりにあおむいとって，木の葉にたまった雨がたれてくるのを口あけてまっている。みずひょろひょろとなくんや。あんまり立派にこしらえると，水ひょろひょろというんや。

（集成　47A「雀孝行」）

話者　北村和兵

6.　釈迦涅槃のはなし　(3)

まむしはな，きれいなむしやってな，お釈迦さまの手のひらに乗ったんや。ほしたら，くいついたんや。ほんで，よせつけなんだんや。

話者　北村和兵

7.　嫁殺し

婆が，自分の兄(1)の嫁をな，ぼい出しかけ(2)てもいかず，いくらおこってもいかず，ほたら，医者へ行って毒もらってきてな，お茶に入れて飲まして殺した。

話者　北村つま

注

(1)　兄＝息子・長兄

(2)　ぼい出しかけて＝追い出そうとして

8.　山姥のはなし

いそん谷の大久保に，ベロリ穴ってね，山姥といって山にすまいしとる人のね，木の葉でみな着物を作って，その穴にいつもいつもおった。そのおばあさんは，そこに住んどったんや。ベロリン婆というや。

話者　村山いちえ

徳山村で採集した昔話の最後は「まっころけのはなし」で終わるのが特徴である。今までに報告されたものは「まっくろけのはなし」ばかりであり，今回もそのように話した話者もいる。しかし，これは「まあ，これぐらいのはなし」という意味からきているので，「まっころけのはなし」がもとのことばであろうと想像される。

また，最初に予想したように戸入の昔話と本郷の昔話を比較すると，語り口の点で関東系と関西系に分けることができる。

今回の調査では「食わず女房」を採集することが出来たが，この昔話は，さまざまの児童文化財に児童文化財化されているという現状がある。私たちはこの点を特に注目したが，この問題については第2報で考察してみたい。また今後さらに調査を続け，徳山村の昔話の全貌を明らかにしていきたいと考えている。

おわりに

今回の調査報告ができるまでには，実にさまざまな人々の協力があった。

雑誌「コボたち」の編集長国枝栄三氏には，徳山村調査の計画立案の段階から貴重な助言・指導をいただいただけでなく，諸準備の労まで煩わした。

徳山中学校教諭で『徳山村史』執筆者の一人でもある大牧富士夫氏には，現地調査に入る前に，わざわざ岐阜までおいでいただいて研究会をもった。徳山村の歴史，村民の生活と人となりなど，調査に必要な貴重な話をしていただいた。

現地では，徳山小学校戸入分校教諭平方浩介氏，宿泊した「増山屋」の増山たづ子氏，「やじろう」の村山真一氏の三氏には，現地の案内，話者・演唱者の紹介など，ひとかたならぬお世話になった。

また現地調査には，今回の報告を執筆した5名のほかに，大森京子氏，沢部清美氏，三戸律子氏，中村直子氏，二村静男氏，宮本陽子氏が参加した。

これらの方がたのご協力で，調査をおこなうことができた。ここに深く感謝するしだいである。また，先に紹介した話者・演唱者の協力によって採集・採譜できたのであり，あらためて謝意を表したい。

（1978.10.10 受理）